陸西遊行囊抄

三

和書門
類
一六五七三號
一七二函
一一架
八冊

内閣文庫
和書
類
一六五七三號
八冊
一七七函
二二架

内閣文庫
番號 和 16573
冊數 8 (3)
函號 177 1154

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

陸西遊行裏抄三

大坂ノ内天満ヨリ　經神崎中國西國路

天満町

天満宮

宮前町　地下町　大工町ノ間ニ立

當社ハ村上天皇天暦年中ノ御草創トゝ祭礼ノ或日

ハ毎年六月廿五日臨時ハ祭ハ九月廿五日也

康安元年九月廿八日和田楠攝州ニ出張ノ時天神ノ太八

一橋文庫
浅草文庫
花迺家文庫

ニ陣スト云云委ハ神崎ノ条下ニ記ス

如何様此地ハ要害ノ処故大坂役ノ時モ塁ヲ構テ防東西兵支アリ左右前後ニ大河アリ其使アル土地ノ由

慶長十九年ノ後ニ天満ヲハ城兵ヲ出シテ今守之同十一月七日ノ挽景ニ左金吾松平武蔵守ノ舎弟中嶋ノ下ノ瀬ヲ渡戸川花房隨之城兵数十人ヲ討松平武蔵守中嶋ヲ渡リ天満ニ向フ山陰及豊後勢等石川主殿及等神崎ノ川ヲ越テ中嶋ニ到ル有馬玄蕃双ハ武蔵守ニ付テ天満ニ向天満ノ城兵塚廟ク拘雑キニ依テ天満ヲ自焼シテ引入寄手則天満ニ入替ル大坂ヨリ天満ヲ拘ルフハ其故アリ今度東國西國ト十ク諸大名ニ秀頼ノ書ヲ遺シテ相頼ル、中ニモ嶋津陸奥守家久ニハ秀頼ノ自筆ヲ染正宗長銘ノ腰指ヲ給ル嶋津同心アラハ天満ヲハ薩列勢ニ守ラセント思シニ嶋津兼引ナリ脇差ヲ返進ス因茲天満ヲハ自焼スル上之

東照宮　別當九昌院　松平下総守清匡建立ナリ

閣基ハ三江和尚ノ　天満宮ノ東ニアリ

同辺ニ町与力町アリ東北ノ方ニ御弓与力同心町アリ

同北ハ寺町　町与力同心町也

天神橋　是ハ大橋ニアラス　源蔵町ノ前ノ小橋
十リ右ハ堀河橋筋十リ

恵美酒ノ宮　右ノ方奏内記蔵屋鋪ノ辺伊勢町ト
冷雲院ト云寺ノ間ニアリ

神明宮　右ニアリ

寺町　神明宮ノ北ノ辺ニアリ　長福寺　大林寺
西福寺　竜渕寺　法林寺　法住寺　妙香院
日通院　正泉寺　本傳寺
不動堂ハ寺町ノ北ニアリ

浜恵寺　寒山寺　右ニアリ

神明宮ノ辺ヨリ左ハ新堀川筋之北川筋ニ雑波小橋大
江橋　渡辺橋　田蓑橋　堀江橋　船津橋　九条嶋ニ到ル
川船筋十リ北川筋ノ支ハ海上行嚢抄ニ記之

古川橋　或ハ古橋共云

曽根崎

是ヨリ左梅小路ヲ経テ新川筋ヘ出ル衢アリ

本庄　右ノ方ニアリ是ヨリ長柄ヘモ行ナリ是ヨリ
長柄江口西ハ傳法ノ方ヘテノ間ヲ中嶋ト
イフナリ

上福嶋

中福嶋

下福島

此福嶋ハ壽永ニ蒲冠者範頼九郎判官義経両大將トメ
平家追討ノ為ニ西海ニ赴クトキ此処ニテ船汰シタマヘ
ヒタル処ナリ支ハ前巻ノ渡辺ノ条下ニ記之

慶長廿八年ノ冬陳ニ向ヒ井將監千賀与八郎此辺ニテ大
野修理カ首船ヲ取シヨリ
十一月廿七日永井右京大夫水野日向守堀丹波守菅沼
織部正山罡主計出テ斥候シ帰リ参テ言上シテ曰敵七
八千野田福嶋ニ出張シテ陳ヲ固ス云
廿八日戸川肥後守雑兵ノ首三ヲ捧ク是ハ福嶋ノ邊ノ
海老江村ヨリ城中ヘ糠藁ヲ入ル兵ナリ戸川兼テ知之
伏兵ヲ以テ待之人夫多切捨タリ其内首三ヲ献スト云
同日北ノ方ノ寄手野田福嶋ヲ攻ントス戸川肥後守堤
崎ニ移リ陣ス敵ハ大野道大小倉作左エ門大野修理カ
士并船手ノ者ニ十ナリ
廿九日ノ夜明ル比ホヒ晦日ノ暁天十ナリ大雨ヲ凌キテ

水陸ノ寄手押寄ル陸ハ戸川肥後守魁タリ戸川カ手ノ者野田ニカケ付堀ヲ歩破リ乗入テ見ルニ敵ハ十シ直ニ上福嶋ニ押ス福嶋ノ西ノ方ニ番船二艘アリ戸川カ手之者岸原其件ノ船ヲ乗取十リ然ルニ九鬼千賀向井等ノ海賊来リテ二艘ノ船ニ乗移ル岸原カ云共二艘ノ船ハ乗取ル処可論人十シ各理不盡ニ乗移ラルヽ中々乗セ申スヽシヨリラレ候ハヌカト鑓振テ突テカヽル既ニ同士討ニ及シトス戸川走リ寄テ曰ク一番ニ乗取ルハ我手ノ者紛ヒナシ但シ水中ノ口船手ニ任セヨト台命ノ上ハ其船捨テ上ルヘシト岸原ヲ制スサテ戸川福嶋ヲ焼拂テ其跡ニ陣ス此時戸川カ手ニ取ル所ノ城兵ノ首七ツ小旗一本ヲ得タリトヽ

野田村

此所ハ古戦場十リ大畧ヲ福嶋ノ条下ニ記之

江源武鑑云元亀元年九月十三日大坂ノ本願寺ト三好笑岩ト一味シ本願寺野田福嶋ノ後詰ノタメニ樓ノ岸河口二ケ所之取出ヘ人数ヲ出ス其勢四千三百騎十リ信長ノ先手佐久間右衛門尉信盛其外濃尾ノ軍士等本願寺ノ勢ニ追立ラレ場ヲ退クヿ十四五町之

同十四日

野田福嶋ニ扣タル三好勢ト本願寺ノ勢ト二手ニテ信長ノ四番備マテ乗崩シ室町殿モ本陣モ敗北ス信長ノ

家人舟拝ヲ手ニ持タル者四人討死ス依之将軍家モ信長モ陣ヲ拂テ引退ク大坂勢慕之信長希有ニメ引退ク家人多ク討レ将軍家モ二ヶ所ニテ御手ヲ負給トゝ云

此処ノ左ノ畔ハ近年ノ新川ナリ此川ヲ堀シ比ヨリ此処狂言哥舞妓ノ定芝居ニ所三処アリ

追分　野田ニアリ自是左ハ九条嶋ヘ行路ナリ

橋　苗分橋ト号ス橋辺ハ御船蔵ニ

九条嶋　御番所アリ

塚本邑　自路右ニアリ

野里川　舟渡ナリ是ハ中津川ナリ

此処ニ嶋村蟹ト云人面ノ蟹アリ背嶋村氏此川ニテ戦死ス其霊蟹ト化リテ人面ノ怒レル形ヲ顕スト云云里俗ノ詞ハ云ヘ記之但尼崎ニテ武文蟹ト云モ此類ナリ

此川下ハ傳法ナリ西海ノ滝中西北國ノ船ノ入所ナリ或ハ是ヲ川尻ニ云ト或ハ淀川ノ本津川ト一統ニナル

処ヲ川尻トヱト一説アリ川尻ニテ読タル別ノ歌ニハ
前巻ノ淀川ノ処ニ書入

紀貫之ちかた日記よりとて富士の号月日の考　みなせ川
とうとうとくりくりつくまで川尻にとまりしに　武人の酒
みなくくおさかよりとて　ヲンホノ四ヲ
こうりうとうかしうとて　妻なる酔ひあらくこうりう
せこなくかくぬらとしかの浦の浦の臣ヨホヒヲ
ら浦りうきさせてくくいつ
いつとしかせうつるはこまとおもひあるの人のつまいと人
こうちなかも彩色してめてあらへ酔しあらへ
うたなくはあすとはのとうの彩色
七日あかは間あるは彩しりあるてこれの船なる川乃
彩ひしてあるこうつ妻はのなるとしとうしし
かくの船乃に彩色の高さすとうこうしき人
まくくくせくくのとさくふ去
ちうのたくめ彩色よめくくに京湾よりあくん
らくしてあ中さ京ヒのくしせうこ
来ときて八月の四ろ船乗
ろ出ろかこまはみまひ
一部よりとのひとをつ
くくとやの彩色あくくと妻祝と妻ち
こ彩色は船出さくの船の人彩色の海さくり
しに多ひてくる成て

あとちの御[illegible]石と生ありし祈ときつゝ来りしの
をとゝ久年うゝ[illegible]うちにつゝめて神明りめ立ゝ
第[illegible]物語月長元四年九月廿四日[illegible]
うてさせ給ひ法師さと川[illegible]ひて十月一日
もまのとゝ[illegible]ものゝ面めて神[illegible]神のゝ
こもを[illegible]ゝ人ゝ河まゝ[illegible]ゝ

後太平記ニ曰天正四年七月七日大坂ノ門跡以使者備
後ノ鞆ニヲハシニス源義昭ノ方ヘ申テ曰信長六万余
騎ヲ将テ大坂ノ城ノ四方八面ヲ囲ミ海陸共ニ糧道ヲ
断ツ兵粮ニ乏シ急キ御助成候ヘト申送ル義昭思慮不
決トカク猶豫シ給フ処ニ小早川隆景聞テ西國ニ御動
座ヽシヽテ味方ノ急難ヲ救不給ハ誰カ志シ通シ候ヘ
キ早ク糧ヲ城中ニ運入可然トテ三嶋ノ警固ノ武士ニ
下知シ兵粮二万俵ヲ送ル已ニ難波ノ川口ニ到シハ信
長ノ勢出向テ防戦ヒ是ヲ奪ントス村上彈正景廣五百
余艘ノ舟ニ乗タル兵ヲ以テ信長勢ヲ追拂ヒ七月十五
日ニ糧ヲ大坂ノ城中ヘト云云委クハ後太平記ニ見エ
ル

織田家譜曰天正四年七月中國之人能嶋求嶋児玉粟屋
浦兵部等積兵粮於船七百余艘而納之於大城(サカ)城信長兵
等防之不勝間鍋主馬沼野伊賀守同越後守杉原兵部野
口某小畑某討死云云

御幣嶋　神崎川ノ船渡ノ東岸中嶋ノ内十リ
或ハ御手嶋トモ云

津国名所考ふかきところをたづねて
月数ふるとしのあらまほしきかな

業苑抄よりいまく天長八年二月廿日法王隆盛王
の内宰相久つさ年
廿五日の夜の酉の時そうりう
寺の新いけ池まのとの北方つ橋はしまさきまいりの
いりさ海りそうりう中にあつさうのさうぬふ
てとくしくまいりあらしく男女方中

弁財天まさ新宮にあつまつるらてくらう海といふ川ハ流
れさまさ成四新ようあり寺をさせ給ふ

御製

まさこと神をはそとなりあ
庭前の花よ空しき春とも
事人君ハ私ハ法ハ永とふ
ていはるる

写百度

おのの方の内宰相神をうしれ世千とせ君をなをうん
書文后方文能也
夜ハ一万四人の高文らつまたりくあつらしさいのり
左云陰密資仲

まゝにてあり其橋にあるめりかの松の
あるを吹よせ来るか住吉の松の古木にかゝる
事おもはる遠浪
毎人之詠歌忍のみ吉よのうれしさ事を思ふ
住吉の松
たゝ雅経卿
古今集の歌の例あまたあり住吉の神
たゝ事歟 実重
住吉神の事は其松のもとせい君よ出まし
荒磯なる岩根
住吉神よりとゝ吹かとゝ吹かとゝ吹
住吉の神
伊中書信実卿

すゝ吉のまつよりとをゝ忘
たゝの代のうれしの歌みし
まんの家
古今集内裏にをゝをしまれ住吉の神
たゝ馬頭資宗卿
神代より知る松住吉の事乃ゆゑ為てゝ
因幡頭源重親
住吉の松賢卿
住の江の浦の原つゝきのゝ
風初花たゝ雅経卿
ひこの桑名の川の河よりとゝ
たゝ京大夫西園寺卿
住吉神の歌忍の代に松のとゝ生ゝ

源中将季宗朝臣

千とせへん緑をかはし津乃国のなにはの浦の春の曙

丹後守経成

何しかくかゝる我命は住吉の松すむ浦の人にならひて

左中弁師賢

あまのさへし潮の花さへあらはれて見えしとも繁住吉の松

太中弁通房

住吉の千世よりすひ生ならむ松のみとりある浜に根にもなる

前中将通俊

かくはとて常の色にも松なしの浪にも千代とも家をかさまし

左近衛佐雅実

幾代の君のよはひもかすもしきみなかに住吉乃松

因幡守忠季

色ことに常よりも見ゆ住の江の松のみとりそ春を知らなむ

左中弁資清

住吉の神のみまへに今日そしる君この御年をまつ祈るらん

刑部丞経範

住吉の松の緑もことしよりは君の御年にならひとらなむ

左衛門佐為房

春ことにかはらぬみとり住吉の松めつらしく神もみるらん

左衛門尉経宗

千とせへん君かみかきのなかめしはかけもたかへし住吉の松

女房

住吉の松を経中ゆく風のおとに岸うつ浪のこゑそまかへる

君しの代ハ風も心あるまさし枝のよろづ代住吉の松
みしはえの千代のつ住ぬまでも花を契して長栄をそる
りまさなしろまさり見しぬ松枝久しき跡の言の葉なりけり

一品宮の女房

末の世に君がみ世さぞ住吉の松も契し千代とこそ見れ
行水に影うつる松ハ一入ひかりて人ハ老その心こそ流つつ
松枝を生をさかれ世をかさね常盤なる松の深緑見んにの為
見しまえの行末にさざ白浪の立浪の影きわらて契せ給
君しの代の久しさ騒きをも絶ぬ神と人ある住吉の松
しらぬまも昔なからの松も都しに波をも契さまりとなる
末まつ住よの千代の浪の千代をうつ浦の代住吉ら
河戸より神の前に君をすめらい出きて住吉社へ参ら
治年君へ下し之行り大さやちにあるの松風浪の御祓に
立の人の見ろを手河この白浪を河まで出て水社白浪
まつ経ハ流きうしわれ住吉のことハ社前へ之わぬ流れ
末代のと考よつの千歳君の世の千代まつの松をみまそうれしき
うら世へ世にまとそありれ住吉の松の千とせハひとときあら祥も

廿六日清船にて出しとぞ

佃嶋　御幣嶋ノ南ノ海中ニアリ川口ナリ古哥ニ田蓑ノ嶋ト読ミハ是ナリ

津國ノ名所考曰田蓑嶋トハ今俗ニ云佃嶋ナリ菊ノ名所ナリ

[illegible]

清人 [illegible]

古今 あやめぐさ 長たちの浮たる浮 [illegible]
あやめ草 [illegible] たちの浮みて [illegible]
よめる
夢之
あるらめ 因芸の浮 [illegible]
前大納言
清輔朝臣 長田みやこ浮 [illegible]
浮 [illegible]
[illegible] 下の [illegible] あやめ草 [illegible] 田みやこ浮 [illegible]
因芸浮の [illegible]
清人 [illegible]
四条
たのしきかな [illegible] 花の [illegible]

[illegible]

同雅 [illegible] 長たちの浮 [illegible]
大納言師教
[illegible] 為義 [illegible]
白河の [illegible] 長 [illegible] 因芸の浮 [illegible]
為氏
長たちの浮 [illegible] 因 [illegible]
[illegible]
[illegible] 長たちの浮 [illegible]
乗蓮法師
文永 [illegible] 長たちの浮 [illegible]

姫嶋　佃嶋ノ沖ニアリ名所十リ

神社考曰

姫嶋者在豊後國与摂津案摂津國凡土記曰比賣嶋松原者昔輕島豊後阿伎羅宮忘神御宇天皇之世新羅國有女神進去其夫未普住筑紫國伊岐比賣嶋地名乃曰此嶋者猶不是遠若居此島神尋来乃更遷来停此島故取本処住之地名以為島号

萬葉集第二和銅四年河辺宮人姫嶋ノ松原見娘子屍悲歎而作歌曰

伊茂可奈波知餘示奈訶佐武比賣志摩能古麻都可宇倍示古氣於布留麻底

河辺示在豊後摂津両國ト云云

中書王

姫古めり　見ずなりぬ　姫を　ひろ　姫浦の　小松ら　ゆ　見ずなりぬ　ようなる　白波

大和田島

是モ佃嶋ノ南沖ノ方ニアリ　傳法ノ方ニツヽキタル川口ノ嶋十リ是モ名所十リ

濱清　ようなる　人　志賀　代　ようの　松の　ようなる　大和田の　浦

縄浦　是モ大和田ノ辺十リ名所十リ

日置少老

縄の浦ヶ　[illegible]

竹嶋村　自御幣島ヨリ神崎ノ渡ニ赴ク右ノ方ニ有
是モ中嶋ノ内十リ

加嶋邑　同右

神崎ノ渡　舟渡十リ　是ヲ神崎川トニ大河十リ

昔ハ此渡モ橋アリテ渡リケルト十リ何ノ代ヨリカ船ニテ渡ス

康安元年九月廿八日赤松信濃守範資摂州ノ守護職ヲ
召故サレ佐々木佐渡判官入道々誉ニ給フ能ツイテト
ヤ思ヒケン和田楠五百余騎ヲ率メ渡部ノ橋ヲ渡リ
天神ノ杜ニ陣ヲ取ル道誉カ嫡子近江判官秀詮舎弟次
郎左エ門兼テ在国シタリケレハ子余騎ニテ神崎ノ橋
ヲ阻テ挑戦フ秀詮進テ中津川ノ橋ヲ越テ戦シカ遂ニ
秀詮勝ヲ失ヒ引ケルヲ楠カ勢追之神崎ノ橋ニテ兄弟
一所ニ討ル太平記ニ委シ

同二年七月和田楠其勢八百余騎野伏六千人ヲ率ニテ
神崎ノ橋ニ莅ム其比摂津國ノ守護ハ佐々木佐渡判官
入道々誉十リ其身ハ京ニアリ十カラ箕浦次郎左エ門ニ
勢百四五十騎ヲ付テ守護代ニ置タリケレハ催促ノ國

人五百余騎神崎ノ橋ニ三間焼落シテ敵川ヲ渡サハ川中ニテ射殺セヨトテ矢尻ヲ次テ待カケタリ和田楠ハ橋ヒト株瀬ト二ケ所歩向テ扣メルカハ八月十六日ノ夜半計ニ橋ヒヨリ廿町上ナル三國ノ渡ヨリ歩渡リ敵ノ後ニ廻ル箕浦カ兵淨光寺ノ要害ヘ引返サントスレトモ不叶箕浦弥三郎討レ同四郎二郎三郎手ヲ負其外ノ兵共若テ討シテ尼ケ崎ヘ逃行道堀ノ中ニカクレテ後ニ京ヘ逃上ルトヱ

天文十二年三月十五日三好細川一手ニ成テ阿波国ヘリ摂列ニ押渡リ京都ニ攻上ントス其比摂加中嶋ノ城ヲハ三好宋三入道守リケルカ長慶テ三好筑前守後弓矢岸キ止ントテ三百余騎ニ神崎ニ出向細川氏綱三好長慶中嶋ノ城ヲ歩囲ム宗三以ニ小勢大敵ヲ拒難ク シテ江波ノ城ニ入テ予鬼右エ門大夫政勝ト一所ニ猶篭ト云ト後太平記ニ委シ

慶長ノ役ニ十一月六日七日中国ノ軍勢群参ス松平武蔵守同弟松平左エ門督神崎ノ川ヲ渡ル戸川肥後守花房志ノ守同助兵衛等驥尾ニ付ク大坂ヨリ番船ヲ置テ神崎川ヲ越卒兵中嶋ニ至ル此時城兵七組織田雲正寺中嶋辺ヲ巡検ス武弘是ヲ見テ勢ヲ進テ川ヲ越テ敵ヲ討ントスル欲ス検使城和泉守カ云敵ハ大軍ニシテ其地守城ニ近シ味方ハ大河ヲ渉テ客戦ナリ敵ハ又主戦之主

客ノ勢異ニメ兵多生アリ川ヲ越テ利アルヘカラス暫ク
敵ノ動静ヲ見給ヘト十リ武蔵守カ曰主客モ多少モ
如何ニモ候ヘ川ヲ渡テ敵ヲ撃ハ勝利疑アラシト猶川
ヲ渡シトス泉忍気色ヲ変シ武蔵守殿我不肖ノ身タリ
トイヘトモ公ヨリノ使節トシテ當陣ノ検使ニ我々詞ヲ
用給ハスハ台命ニ背キ給フ十リト云武列此詞ニ服
メ馬ヲ止メシム其間ニ敵モ早ク引テ入武州ノ虚ノ如
ク川ヲ渡テ敵ヲ撃ハミ十コロシニセンモノヲト當午
ノ諸将歯ヲ噛シトナリ　同日ノ晩景ニ左金吾ハ中嶋
ノ下ノ瀬ヲ渉ル戸川花房相従フ城兵ヲ討フ数十人十
リ武州和泉寺ニ向テ大ニ怒リ於之武忍中嶋ヲ渡テ
天満ニ向フ山陰道ノ勢及ヒ豊後等石川主殿双等神崎
川ヲ越テ中嶋ニ至ル有馬丹番双松平武蔵守ニ属テ向ニ
天満ニ城兵塚中廣クシテ拘難キニ依テ自焼メ引入

神崎　自大坂八軒屋到于此
三里

是ハ神崎ノ船渡ノ西岸ノ駅宿十リ昔ヨリ遊君住
所十リ古書ニ見エ名所十リ

万葉　神崎の あ[illegible]

上鵤塚　女郎塚ト云云　神崎ニアリ其故ヲ不知

慶長大坂役ニ行桐市正カ軍士ト一揆ト神崎ニテ戦ヒタルニ一揆ハ大勢ナリ市正カ軍士汐キ難ク伊丹ヘ逃行シテ大坂条下ニ記之

長渕　神崎川ノ西辺神崎ノ駅南ヲ云

此処昔ハ海辺ト見エタリ行基菩薩有馬ニ到テ一人ノ病者ニアヘルトキ長渕ノ濱ニテ奥ヲ得テ与シテ旧記顕然タリ

瑠璃山海臨寺ト号シテ真言宗ノ寺長渕ニアリ

此寺号モ海辺ノ故ト聞ユ

押當寺ハ聖武皇帝天平五年七月行基ノ開基本尊ハ茅師如来春日作其比境内最廣大ナリ今ノ此寺ヘテ境内ノ内ト云云六坊ハ北寺ニ有之其処ニ熊野権現弁財天宮于今アリ正月十七日ニ臨海寺ノ僧彼社ニテ修法アリ昔ハ寺領三百石ト云云然ルニ荒木村重カ乱ノ比退轉ス　昔温湯ノ涌出セン跡トテ寺辺ニアリ是ハ有馬ノ湯筋ニテ在シトヘ　昔日此寺焼亡ス本尊ハ茅師ハ榎木ノ枝上ニ飛去給村老後ニ夢ノ告ヲ象リテ堂中ニ安置ニ奉ル今ノ庄屋ノ二三代ノ以前ト云傳フ

長渕名所ヘ

按之　人ヒとまれとおもふ波ハ津の国の流江とそ人ハ知ける　神そ久ちぬる

淡人ちらす

国立公文書館
National Archives of Japan

猪名湊　或ハ入江共長洲ニ並テアリ

千載　うすゐ色にかすみの湊よりきしの廉のあけぼのの松を　隆信

新後撰　風さむみ春やまつらん志賀の浦なる猪名の湊よりあけぬる　従定法師

夫木　千載集猪名の湊屋の内月の秋たけさひしき　瑞奈大臣

同　湊をいでぬ舟の跡なる猪名の海の秋と也ぬる　厚季

同　海ゆかん田舟の跡なる猪名の湊よりあけぬる　[illegible]

追分　神崎市中ニアリ自是北ニ越ク小有馬ノ温湯ノ路并ニ多田ヘモ行

坂部里　建武ニ赤松律師則祐カ陣所ニ太平記ニ見エ

久々知里

板田ノ橋　名処十リ難波堤ヘ下ル方ニアリ古哥ニ小墾田（ハタ）ノ橋ヨリ塚口ノ細キ流ニ渡スト小橋アリ　人丸

新後撰　小墾田の板田の橋こそ忘れぬ物なれ山もこゆらん　[illegible]

共道ノ丁ハ前巻ニ記之古哥畧之

願成就塚　池田塚　鶏塚

稲寺邑

猪名笹原　路ヨリ東ニ少シノ篠原アリ

為家

多馬山タヽヱタルヲ捨長神ノ家ヲ猪名笹原

猪名　野山川モニ古奇多シ前冊記之

猪名ノ湊ト云ハ尼崎ノ辺ヨリ九ニ記ス

御願塚

伊丹　自神崎到于此

二里

此所ハ酒酢醤油ヤトヲ多ク造テ諸国ニ出称世諸

白酒ハ此所ノ名物也

旧墨アリ是又前巻ニ記之

此城ハ荒木摂津守村重先祖ヨリノ守城ニ天正六年ニ

信長公諸将ニ命メ攻給ノ村重逃去テ尼崎ノ城ニ入ト

云云前冊記ス

昆陽　名所十り尼崎入クミノ処十り

松原　池十ト古哥ニヨメリ　永泉式部

津乃国なる人の水無瀬川あふれあまの世をぬき

律師仏覚

こゆの池の水あれ水ぬきて池成るこゆの池水

北外古哥等前冊ニ記之

崑崙山昆陽寺　昆陽ヨリ西ノ方七町中寺本村ニアリ

北村モ昆陽ノ郷ノ内十り

押當寺ハ聖武天皇ノ勅願行基菩薩ノ開基ニ行基ハ泉

州ノ人又ハ百濟國ノ人高志氏主鵤ト号ス行基十五歳ニ

シテ出家天平勝宝七年ニ入滅トニ行年八十七十り

五幾内其外所々ニ霊跡アリ文殊ノ化身トニ傳フ

蓬莱山清澄寺　昆陽ト小濱ノ間西ノ方ニアリ

本尊ハ荒神ニ

當寺不知開基中興ハ寛平法皇ノ勅ヲ奉テ慈心坊尊

恵之開基ニ北僧モ権化ノ人ニテ焔王ニ逢テ冥途ノ事ヲ

委ク見聞シ其シルシニ焔魔王ヨリ地蔵菩薩像ヲ得テ

蘇生シタル人十り今其霊跡伊州ニアリ此寺ヨリ尼ヵ崎

ヘテハ行程五里也

古今著聞ニ慈心坊ノ事アリ

源平盛衰記曰摂津国清澄寺ニ慈心坊ト云テ貴キ法華ノ

持経者有キ去兼安二年十二月廿二日閻魔王宮ヲ
リ淨衣装束ノ雜色ヲ使ニテ請書ヲ送ラル、狀ニ云
屈請　十萬人持経者内
摂津国清澄寺住僧尊恵慈心坊
右来廿六日早旦閻魔羅城大極殿可被来集依
宣旨屈請如件
兼安二年壬辰十二月廿二日丙辰丑時閻魔廳ト被
書タリ尊恵閻魔書披見ノ後領狀ノ返事ノ偏ニ死去ノ
思ヒヲナシロニ弥陀ノ名號ヲ唱ヘ心ニ引摂ノ悲願ヲ
念ス既ニ廿六日ニ至ツテ睡眠ニ被催テ住房ニ臥ス前
ノ雜色出来テ早参セヨトス、ム時ニ二人ノ童子二人
ノ従僧十人ノ下僧七寶ノ大平化現ノ尊恵自然ノ

法衣身ニ纏ヘリ即車ニノレハ従僧等西北方ノニ
向テ空ヲ飛テ閻魔羅城ニ至ル外廓耿ニトメ其内廣
々ヽ其中央ニ七室所成ノ大極殿アリ大極殿ノ四面
中門ノ廊ニ各十人ノ寡官有テ十萬人ノ持経者ヲ配
分ノ各一面ニ着座セシム講師読師高坐ニ上リ餘僧
法用メ十萬人大行道ス行道已後閑白説法メ十萬僧
讀経ス其声寡衆ニ充満テ其益罪垢ヲ洗ヌヘシ大王
玉坐ニ坐シ寡衆階下ニ列ス聽聞アリ獄田ハ湯鑵ヲ
出テ罪人抛鐐ヲユルサレタリ轉読既ニ終テ十萬
僧供養ヲヽヲ供養又終テ諸僧本国ニ帰ル慈心坊
千部法華ヲ寡衆ニ勸進ノ為ニ暫残留テ閻魔王ト
問答ノ次ニ申ケルハ日本ノ将軍大政大臣入道清盛摂
摂津國和田御崎ニメ千僧ノ持経者ヲ請メ丁寧ノ讀経
説法侍リキ今日ノ十萬僧會ノ如クナリキト奏シタ
リケレハ閻魔王随喜感悦メ言ク我彼千僧讀経ノ時
ハ影向衆トメ聽聞シキ清盛入道ハ直人ニ非ス慈恵
僧正ノ化身ヽ故ニ我毎日ニ三度文ヲ誦メ礼ヲ作ス

敬禮慈慧大僧正　天台佛法擁護者
示現最勝將軍身　悪業衆生同利益

汝此文ヲ以彼相國入道ニ可進トソ宜ケル今案スルニ
慈慧僧正ハ觀音ノ垂跡ヽサレハ大權ノ化現方便
ヲ廻シ実業ノ衆生ヲ利益セン為ニ造罪招苦ノ肯
ヲ示シ盛者必衰ノ理ヲ顕シ給ヒト覺エタリ

小濵　自伊丹到于此
一里

紫雲山仲山寺　此寺ハ小濵ヨリ十五町子ノ方中山村ノ北ニアリ

當寺ハ聖徳太子ノ開基本尊十一面観音太子ノ御作巡礼ノ札所十ヶ坊舍五宇アリ寺領ハ摂州国中ニテ田一反ニツキ米三合宛十ヶ所ニ荒木乱ノトキ退轉ス其後豊臣秀頼卿ノ再興十ヶ

長平都婆　櫻ノ名木アリ　笠松山　近所十ヶ

天狗塚十ヶ所アリ

追分　小濵ニアリ自是左ニ赴クハ有馬ノ路右ニ赴クハ多田ノ路也

寂明寺ノ滝　路ヨリ北廿五町ニアリ

澤ノ池　寂明寺ノ滝ノ流十ヶ

石場山　阿古坂峠

平野邑

平野大明神　平野邑ニアリ

多田旧壘　平野邑ノ南ニアリ信長郷摂州ニ御馬ヲ入ラレシ此城ニハ塩川伯耆守居ス信長記ニ此支有之欤

鼓ノ滝　或ハ鼓ノ山　多田ヨリ南十余町ニアリ

神秀山満願寺　多田ニアリ

本尊観音聖武帝ノ御草創ナリ當寺ノ丁是又

多田院　伊丹ヨリ二里十一町下ル

多田院ハ満仲ノ旧跡ナリ前巻ニ記之仍畧之

生瀬川　舟渡

生瀬　自小濱到于此　一里

自是有馬ニテ二里ノ間武庫川四十八ヶ瀬左右ニ渡テ行

船坂　茶店アリ

有馬　自生瀬到于此　二里

當所ノ丁前巻ニ委ク記之仍畧之

今福邑　是ハ神崎ヨリ尼崎ヘ行順次十リ

慶長十八年十一月廿六日佐久間河内守小栗又一ガ候ニ出帰リテ言上スル様ハ今朝城兵ヲ青屋ヨリ出ス大和川ノ南ヲ志宜野（鴫野ニト）ト云其向北ヲハ今福ト云フ城ヨリ堀切堤筋ニ三重宛両所ニ柵ヲ構ヘ大野カ手ノ者守之今福ハ矢野和泉守飯田左馬助志宜野ハ井上五郎左エ門堅メタリ東兵鴫野ハ米沢中納言景勝今福ハ佐竹左京大夫請取ロニテ未明ヨリ兵ヲ発シ柵ヲ破ル城兵防戦ストイヘ氏勢微ニノ不叶暫時ノ中ニ此競ヲ以テ片原町ヘ乱入城兵是ヲ聞テ蜂ノ如クニ起テ出ル今福ヘハ木村長門守堀田冨書後藤又兵衛駆来ル佐竹勢一ノ柵ヲ奪テ三ノ柵ヲ堅メタリ於此所一挑戦ノ数刻ナリ互ニ勝負ヲ不決然ル所ニ木村カ兵士師五左衛門堤ノ北エ小船ヲ入横合ニ鉄炮ヲウツ依之佐竹勢三ノ柵ニ引入木村カ与力松浦孫左エ門堀田カ郎等浅野清兵衛真先ニ進テ鑓ヲ合両人共ニ首ヲ得タリ松浦先達テ城中ニ持参ス秀頼御ノ右筆白井甚左エ門筆ヲ取テ爰ニアリ未ル記松浦怒テ責之白井諾シナカラ尚注サス然ル所ニ浅部某首ヲ持来テ申云鑓ノ場ニテハ我一番タリ松浦ハ馬上我ハ歩行ナル故ニ遅参スト云此時白井松浦ニ向テ曰ク寂初ノ首ヲハ心論アレハ二ノ首ヲ見テ一ヲ記スヿ犯筆ノ故実ナリト云リ一二ノヿ此節アル故ニ変シ難シ首二ト書テ二人ノ名字ヲ記スト云云

木村カ軍士ニ鑓ヲ合スル輩ハ川崎和泉上村金右エ門
高松内匠大井何右エ門長屋平大夫佐久間蔵人大野半
次大塚勘右エ門青木七左エ門草賀五郎右エ門若松市
郎兵衛小河甚左エ門斗藤加右エ門等十リ奥ノ柵ニテ
木村長門守波多野兵衛青木四郎左エ門鑓ヲ合此外長
門守カ軍士鑓ヲ合太カ歩スル郎等多シ佐竹戈宣ノ軍
将渋江内膳 鳥毛ノ母衣ヲ掛ル 士卒ヲ将テ先登ニ進ミ
桃戦シカ鉄炮ニ中テ死ス梅津半右エ門戸村十大夫戸塚
九郎兵衛秋田兵庫等粉骨ヲ尽ス城兵首ヲ得ル者佐
久間蔵人高松内匠 鑓場ニテ 大野半次郎小河甚左エ門 三ツ柵
ニ年礼彦三郎井上与右エ門知徳院等 奥ノ柵十リ大井
八引取トキ鉄炮ニ中テ死ス 同時ニ志宣野ノ攻合アリ
略之
本多出雲守ハ佐竹ニ代テ今福ニ向フ本多陣ノ部下ニ
ハ浅野采女正真田河内守同弟内記松平石見守秋田城
介仙石兵衛大捕新庄駿河守等十リ

梶カ崎

吉備ノ社

自路右ニアリ此社ハ錦乗寺村ノ内十リ

里俗傳テ是ハ吉備大臣ノ霊社十リト此大臣ハ養老元
年天平勝宝四年両度入唐ス大儒十リ宝亀六年十月
薨ス行年八十二歳ト云ヘ錦乗寺ハ大臣ノ菩提処十リ故

ニ靈社モ此所ニ立トヽ云

光明寺　本堂大日如来是ハ兵庫ノ築嶋ノ人柱ニ立シ
明月カ父刑ア尤エ門国春トヽ云シ者ハ守本尊
十リ當寺ニ明月女カ石塔アリ

芦原

此所ハ草香ノ左エ門トヽ云シ者ノ幕ヲ賣タル所トヽ云

七松村　尼崎ノ前ニアリ昔ハ七本松トヽシトヽ之

此支ハ芦苅ノ謡ノ本ニアリ

刑部尤エ門国春ノ旧宅ノ跡村ノ中ニアリ国春ハ近衛院
ノ廳官十リ一女ヲ明月トヽ号ス其故ハ國春鞍馬ノ多
門大ニ祈テハ八月十五夜ニ誕ス明月トヽ号ス其北同国
能勢ノ住人蔵人宗包ノ子兵エ尉包次トヽ云者明月ニ戀慕
シテ遂ニ盗之又母不知之而兵庫ニ迷行シトヽ十リ此ノ
ハ舞ノ本兵庫築島トヽ云書ニ委シト里俗ノ語ノ儘記之

天正七年十月伊丹城中ニ有シ荒木摂州カ軍士ノ妻子

百廿人ヲ磔ニ掛ラレシ処ニ是ハ信長卿ノ時也尼崎ノ
条下ニ此ヿヲ記ス

大物ノ浦　尼崎ノ東ノ町十リ

大物橋　長十三間

此所ニ源義経京ヲ落テ西國ニ赴レシ時ノ旅宿并ニ静
カ舍ノ所并慶カ宿所モアリ
此浦湊ハ茶ノ店多シ西海ノ乗船ノ使宜ノ地ニ自大坂
赴西海人ハ此処マテ陸路ヲ経乗船ノ勝手宜シ
此処ニテハ暮六時過レハ船ヲ不レ出朝モ六時過テ船ヲ
出ス

後太平記曰應仁元年山名細川鉾楯ノ時大内政弘ハ其
比周防ノ山口ニ在テ山名ニカヲ合ントス其勢五万余
騎伊与ノ河野宇都宮ヲ先達テ兵船一千七百余艘ニ取
乗ル
同八月八日摂津國大物ノ沖ニ碇ヲ入京軍ノ安否ヲ伺
フ此由備後備中ノ早馬細川方ニ告シカハ大内カ大勢
洛中入立テハ叶フマシ出向テ是ヲ討止ンヨトテ赤
松伊豆守政則同次郎法師秋場備中守并摂津河内ノ軍
勢七千余騎住吉雑波尼崎ニ繼テ所々ニ城郭ニ楯籠リ
防戦用意専之大内カ勢ハ敵ノ多少モ不知シテ沖ニ
四五日漂飜ス赤松次郎法師兵船二百艘ヲ以テ戦之赤
松終ニ負テ引退ク大勢追之陸ニ上レハ鳥居野ニテ赤松

勢返合テ戦トイヘ𪜈赤松又負テ洛中ヲサシテ引入レハ大内介政弘逃ル歟ニ追スカヒテ是モ京ニ入山名カ勢ニソ加リケル

蓬莱山海平寺

本尊辨才天是ヲ若宮ト号ス是ハ平相國清盛安藝ノ厳嶋詣ノ刻此大物ノ浦ニ到リ給フニ风波荒カリケレハ弁才天ニ祈給ヘハ海上靜リケレハ浄海ハ常ニ身放ヲノ持給フ弁才天ノ像ヲ此所ニ安置シ一寺ヲ建立トニ云

浦ノ初嶋

戸田左门氏鉄領知ノトキ此嶋ニ別館ヲ立テ遊望ノ地トス

望海亭 臨风客ナト云舎軒アリ此額ヲハ朝鮮人雪峯書之其ニ庭ニ弁慶石トテアリ此石ハ戔経大物ノ浦ニ到給シトキノ来歴アル由

名所也

玉葉

為兼 ゆふしほのてしほにみちてかりかね霧こめ沖つ浪まの浦のはつ嶋

新後拾遺 紀のうみや沖津風にや雲晴て雪耳のこれる浦乃初嶋

一ノ洲　大物ノ沖ニアリ是モ名所也

のせ　のらず　湊の沖乃一洲　洲ハ先年今なし

行家

尼崎　自神崎到于此
　　自大坂到于此三里

城主　青山播磨守

古城新城トテ二所アリ　此古城不知盧鶴但楠正成
領ノトキ築之矣其比當城ヲハ楠正成之幕下平野孫大
郎水谷又四郎湯浅法洛守五百余騎ニテ守之
天正年中ニハ荒木摂津守村重カ脇城ス
慶長ノ末大坂役ノ比ハ建部三十郎某守之

新城

是ハ元和三年戸田左門氏鉄賜當地江州膳所ヲ轉ニテ
此所ニ来ル分限五万石ス其比氏鉄古城ヲ壞而築新城
中西国ヨリ陸洛往反ノ輩此地ニ不到ト云フ十ヲシ最肝
要ノ守把ス
寛永十二年青山大蔵大輔幸成賜之轉遠州掛川移當城
分限五万石　幸成ノ後息大膳幸利相続而領之幸利家
督ノ時高ノ内三千石舎弟丹後守幸通二千石同藤右エ門
千石同藤蔵ニ配分之但新田共　幸利分限四万八千
石十リ

仝高　同播ニ守幸明　貞享元年ニ家督

太平記ニ延文五年将軍義詮南方ヲ攻ントシ給シトキ尼崎ニ二日逗留ノ了ヌリ

後太平記曰将軍源義昭備後國ニ御下向在テ毛利小早川ヲ頼セ給ヒ上洛有ヘシト聞ニカハ幾内国中ノ武士ヒ大半御方ニ馳加ル中ニモ荒木摂津守同志ニ守一族隼人佐同新兵同越中守同久左エ門野邑丹後守牧左兵衛尉各摂津国伊丹花隈尼崎三ヶ所ノ城ニ楯籠ル同国宮野原城ヲ小岸備前守同宗右エ門尉相守城孫一乗寺山ノ城ヲ渡邊宮内少輔二千余騎ニテ楯籠ル別所小三郎長治同山城守同小八郎播州東八郡ノ兵五千余騎ヲ師テ三木ノ城ニ楯籠ル同一族櫛橋左京亮ハ志賀多ノ城ヲ守護シ神吉民部少輔ハ神吉ノ城ヲ守ル高砂別府ノ城ヘハ梶原平三兵衛楯籠淡路ノ岩屋ノ城ニハ丹地太郎兵衛尉神野加賀守小林民部少輔三百余騎ニテ守之紀州雑賀三緘入道鄭孫市的場源七郎ハ一揆一万余人ヲ率シ和泉国千石塚ニ塚ヲ築門跡ノ一揆ヲ補将軍ノ上洛ヲ待向フ摂津木津ノ田中ニハ俄ニ要害ヲ築備後国ノ住人粟屋内蔵亟元宣二千余ヲ属門跡一揆ノ補ノ城ニソ枝定ケル伊丹尼ヶ崎ノ城ヘハ因幡守八百余騎ニテ加勢ニ入同花隈ノ城主荒木摂津守同志ニ守加勢ニハ防州ノ住人杉次郎左エ門尉元家一千餘討入

淡路ノ岩屋ノ城モ勢微ナリトテ安藝国ノ住人長屋九
郎大夫八百余騎ニテ加勢スト云云

慶長軍記曰慶長十九十一月其比泉州堺ノ政所ハ関東ヨリ芝
山小兵衛ヲ以テ令掌之給フ大坂ヨリノ警固トシテ未
座内膳槙嶋玄蕃父子ヲ遣ス彼津ノ商人ニ今井宗薫ト
云者アリ是ハ関東ノ御恩顧ノ者ナル故ニ大坂ヨリカ
レカ所帯ヲ没収シテ宗薫ヲ捕ヘテ令篭舎芝山小兵衛
驚テ出奔ス片桐市正茨木ノ城ニ在テ此度ヲ聞テ此雑
ヲ救ハン為ニ兵七十余輩ヲ堺ニ遣ス尼崎ニ至テ是ヨリ
船ニテ渡海シ堺ニ至ントス尼崎ノ城ヲハ建部三十郎
守之建部幼稚ナルニ付テ松平武蔵守ノ家臣池田越前
并宮城筑後南部越後ヲ以テ被レ守之是ハ建部ト武州ト
ハ縁者タルヲ以テ　大御所兼テ此仰アリ片桐カ堺ヘ
遣ス援兵ノ内ニ多羅尾半左エ門ト云者アリ尾崎ニ妻
子アリケレハ傍輩ニ相談シテ尼崎ニテ船ヲ請テ堺ニ
渡ル夜半ニ堺ノ津ニ着ク芝山カ出奔ヲ不知今井カ家
ニ入テ在ケルヲ大坂ノ兵是ヲ見付テ赤座模嶋ニ告ル
則是ヲ捕ントス多羅尾其家ノ上ニ登リ矢種ノ有ル程
ヲ射盡シテ家ニ火掛自害ス市正カ軍士等尼崎ニ来リ
テ船ニ乗ントス催シケル時ニ近辺ノ一揆蜂起シ又大坂
ヨリ大野修理カ兵士米村六兵衛同子次大夫同市兵中
島ノ一揆ノ将喜多村三右エ門等大勢ニテ駆来ル于時
尼崎ノ守兵出テ片桐カ兵ヲ救ン哉ト評ス宮城カ曰市

今ハ明今ニテ大坂ノ城兵十リ如何ナル謀ノ在モ不知
縦ヒ片桐カ兵ヲ討テ必定ニテモアレ此城ヲ出テカレ
ヲ救ハンテ近辺ノ芦原ナトニ夜中ニ伏兵ヲ設テ城中
ニ駈入ンモ難計兎シテモ角シテモ此城ヲ大坂ヘ取レ
ナハ武蔵殿ノ身上危アルヘシ市正ノ兵ヲ救ントスル
テヲハ相止ラレヨト云越前越後モ同之門ヲ堅メテ音
モセス扨テ後ニ尼崎ノ城兵片桐カ軍士ヲ捨殺シタル
ハ武州大坂城中ニ志ヲ通スル故ナリト謗スル者アリケ
レ氏武州ノ臣伴太膳ト云者宮城カ討ヒ道理ニ當ル処
ヲ一々ニ申聞キケレハ大御所最ナリサコソハ討テ
ヘケレト御感有ケレハ武州ニ雑ナシトテ同月四日之
十九ニ片桐カ軍士神崎ニテ相戦トイヘトモ一揆ク
大勢ナリ防キ難クシテ伊丹ハ要害ノ地ナレハ彼所ニ
入シトス一揆後ヨリ慕ヒ来ル伊丹ノ郷人ニ日来ハ片
桐カ余ヲ重ンセシカ共扨節ハ大坂ヨリノ咎ノヲ思セ
門ヲ閉テ一人モ不入片桐カ兵無為方茨木ヲ心懸テ
引退ク片桐カ兵ハ疲労シテ息断行歩モ心ニ任セス一揆
ハ新手ヲ入文ノ凡ノ起カ如ニ前ニ遮リ後ニ襲ケレ
ハ討レ或ハ自害シテ一人モ不残ニケリ

玉江橋

或ハ玉柄ト書今ハ庄下ノ橋ト号ス扨橋ノ長サ
廿一間半東西ヘ渡ス此ツヽキノ入江ヲ雑波
入江ト号ス是ヨリ北ヘ入江ノ橋ヲ堀江橋ト云後人ノ
名ツケタルナルヘシ

梅ノ水　西町侍屋敷ノ内ニアリ水ノ色白キ由、

是ハ昔難波ノ梅ハ此処ノ由古老ノ傳アリ梅ノ木ハ井水ノ辺ニ有シカ梅モ枯ハテ井モ壞レタリ

東難波　西難波

此二邑ハ尼崎ノ西北二里ニアリ其西ニ梅ノ老木モアリトニ云イカナル故トモ知ル人無不審ナル丁ニナリ

難波津トニ云モ難波浦トニ云モ天王寺辺ヨリ大坂ノ御城マテヲ云欽正説トニ云

難波橋　尼崎ノ城門西ノ大手ノ橋ヲ云

本與寺　精進院共ニ云山号ハ此侭ニハ無之

此寺ハ日隆上人ノ開基ニテ京都ノ本能寺ト兩本寺ニ昔ハ東西トテ本寺ノ差別有ケレトモ天和二年ノ秋詞論アリテ兩本寺トナレリ日蓮堂　日隆堂　自作黒佛ト号本堂ノ本尊ハ釈迦如来ナリ

坊舍八坊アリ代々ノ綸旨諸家ノ寄附其外霊宝数多

六月十八日ヲ式日トノ毎年舫之

瑞雲山廣徳寺　當寺不知開基田畑村ニ西長洲ナリ

禅宗大徳寺ノ末寺也享禄四年ノ夏將軍源義晴公之管領細川武蔵守高国京大夫晴元ト天王寺ニテ合戦シケルカ高國負テ此寺ニ来テ自害ス道号ヲ常植ト云

天正十年六月信長公於本能寺御生害ノ時羽柴秀吉播磨ヨリ上京ノ時秀吉此寺ニ入テ剃髪シ給ト云云

寺領世石　御朱印地ナリ

栖賢寺　在田畑村

号朝宗山　禅宗ニ

月峯山大覚寺　寺領五十石

當寺ノ開基ハ日羅上人ニ中興ノ開山ヲ琳海上人ト云

本尊ハ正観音

敏達天皇ノ時日羅来朝シテ聖徳太子ヲ拜シ給トキ太子霊場ヲ求テ國土ヲ安穏ナラシメント思フト宣フ于時日羅所々尋給フニ光明赫爽トシテ此浦ヲ照ス其光ヲ慕行ハ同国ノ能勢郡ノ月峯ノ槻木ニテソ有ケル此木ノ様ヲ奏シケレハ太子急御幸ナリテ仙人ニ仰テ件ノ木ヲ伐シニ千手観音出現シ給フ太子歓喜シ給フ上人トモロトモニ一寸八歩ノ尊像ヲ作篭テ此寺ニ来リ大伽藍ヲ建立シ尊像ヲ安置シ給今尼崎ノ城ノ東大手ノ辺昔ノ寺地ナリ其処ヲ大覚寺町ト云其後大潮ニテ破壊ス元和三年城ヲ築シ時今ノ西町ニ移ス然レトモ本

堂モ十シ尊像ヲハ草堂ノ内ニ安ス爰ニ沙門実祐ト云シ像アリ霊場ノカク廃レ行ヲ歎キ寛文元年ノ秋大願ヲ発シ同三年ニ建立之普請ノ半三月十八日ヨリ開帳アリテ四月六日ニ開帳ス其間ノ奉加金銀米銭ヲ以テ修造ノ工料トス

同寺中ニ某師堂アリ貞享三年ノ冬建立造畢

此加来ハ　太子ノ佛立奉修理作之

一　弁才天社　同寺ニアリ

一　海岸寺

當寺ニ蒙武文ノ石塔アリ武文其比女一宮ノ御供シテ此所ニ来リ乗船ノ砌リ宮ヲ松浦五郎ニ奪レ憤怒ニ不堪立腹切テ海ニ入其霊蟒トナリ人面ノ怒レル形ヲ顕ス此辺ニテハ武文蟒ト云前ノ今里川ニテ嶋邑蟒ト云モ同類ノ

貴船大明神　若宮ト号ス

當所ノ守護神ナリ

法園寺　浄土宗　當寺ノ開基ヲ不知

額ハ後陽成院宸翰ナリ

天正十六年二月肥後ノ国主佐々陸奥守成政故有リテ
此寺ニテ切腹ス位牌アリ　成政寺四品拾遺補闕庭月
道閑居士ト云

丹露寺　浄土宗

此寺三月論寺殿ヨリ法然上人ヘ賜リ給シ袖ノ下トイフ
釜アリ　幕屋ノ由

右ハ尼崎近隣ノ寺社ニ
一自尼崎有馬ヘ七里
一同　三田ヘ七里
一同　丹路ヘモ行ハ是前ニ記之

寺井ト云者アリ高倉院厳嶋御幸ノ時御宿シタル者
ノ末ト云々

言葉陸奥海道の紀行あいもの川廃れたるはとゝ
ゝ海辺つのを船ゝ邦つかの大ぶこんぢ所はくゝ
まゝ者つ成ゝ所ゝて海ゝ形ゝこのゝ所ゝ入ゝ海辺
ゝもゝおゝゝゝ世海子ゝゝ乃ゝ
この所ゝゝ世ゝ世ゝ所ゝ所ゝ海
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
みゝゝ用ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゆはのさとわたくさきはりしとうゆあみこのしのはゆ
さゝめのゆ事并ゆ并事にゑくいりんアてそこのハゆく
おゆゆゆはゆ形ゆめ高はのうら城ゆめくりてれ
ゆゝをのいぬメれ面ゆつこのゆてゆもちさ榜乃とりいの
しこのゆこ出ゆ久心ゆそきゆりゆ面ゆりゆくゆ
らもゆゆちわこれゆゆとゆゝをゆ上取さ又このちゆ甲ゆ
福原ゆゆつのをゆ上取さゆ形ゆてゆゆゆ形ゆとゆ大
ゆり宗盛おゆ形ゆゆをらゆゆゆゆたゆなゆ城もゆゆ
てゆゆゆゆれゆとゆゆゆ上形ゆゆゆゆゆゆ
高ゆさゆゆ面ゆ形ゆゆゆゆゆゆゆゆ

東新田村

琴浦明神　邑中ニアリ此神ハ左大臣源融公ヲ祭ル

里俗傳曰融公六條河原院ニ陸奥ノ千賀ノ塩竈移シ雑波ノ浦ヨリ毎日汐ヲ汲テ運送ス則此所西ニ雑波ノ浦アリト云云考ルニ雑波ハ大坂ノ辺ナリ最ノ此西ニモ同名アレヒ都ヨリハ行モ遠シ若此外其比融公ノ領知歟

雑波ノ浦　是ハ今俗太布ヵ服ト云今ハ道意新田ニ云

所ノ南ノ海辺十リ或ハ雑波ヵ崎ニ云

所出

外物　風吹ハ海ハ〇潟ニ濱ヵ多芦多ゆ多ゆ立ゆしゆ

里俗此哥ハ此所ヲ讀シ由云傳フ如何

武庫川　此川南ノ渡ハ狭シ川幅二町京海道ワ四町十リ名所十リ

万葉　むこの河の彩流もみこの河のうこ国氏奇久もてきれぬきみ家武

たゝみ人ふ知

支考

千々石美ふ　武庫川ハ河のとゝとゝめぬこの河を見ぬ人ハ見ぬ五月雨の比

ぬ家

支木　流れ出る清流氏乙川おろし茂り木を立て乃山ろ

此川上ハ有馬ノ辺ヨリ流下ル

武庫川浦ト云ハ武庫川ノ海ニ入処ヲ云武庫ノ崎ニ云

万十五　胡ぶくまこ江ゆて久まもむこの浦波千氏しるみ田鶴なく

同

俳諧拾　須磨氏北ハみ立てこゝとゝせもむこ氏浦とりゆ家ふ人

堀川

旅ゆゝて秋さり衣さむ家ぶ耳いりゆ家そむこの浦ふを

たゞ大原

五衆　夕附日加田の氏海を漕ふ耳ふ之ゆむこの浦風

人丸

同　むこ氏浦のとまりゆ家ふらしいさり舟のまのたり耳波ふ

丈夫　むこれ海潮とも老に漕ひ入こるとも毒きも
　　素見
　　行家
同　春も深しの方世成の事をむこれ海月とそみつ京高ハ方
　　老方
同　むこれうゝ石のくハしてゑきをゑ之春れ行方に田川き
　　俊成
同　秋春れむこの山海とこ事は深のこの年をあぬ行波れ
　　素性
同　久さ連をむこれ海汐みちぬゝし入江のもとりてゑさ之
　　小大進
同　春の月さへ海原むこれうゝの塩干れるに小舟つさふ

武庫山ハ此辺ヨリハ北十リ此山ノ丁ハ甲山ノ条下ニ記之

名所方角抄あいも之浦海川海

川小ちり面一ぶこのれ面あり只小あり大田ちりハ

油断ならぬうよたあり

小松ヵ崎　武庫川ノ西ノ川尻ヲ云或ハ高師濱ニ

云里俗ノ説十リ

是ハ小松村ノ西十リ

置始東

所勢物語　大津社宮師の濱の松ゝを枝とぬきて家ゝあと悔

ノ私曰其哥ノ詞書ニたかみハあ行幸侍り芳賀付
とめ給ふとゝ此所ヲヨミタル歌如何

隆季

大徒の松ともいひ祢と松ともいてゝ海のうれ浪あらくよりて

小松カ崎トハ紛ルヿナク此処ナルヘキ歟

名耳ハすゝ浦さゝ波ハ汲こていふ松の崎あノ名ゝ名ゝ

小松殿旧館ノ跡　道ヨリ南ノ方ニ有ト十リ是ハ近都
ノ時ヨリ前此地ニ館アル歟但維盛
ノ館其支不審巌嶋ノ参詣ノ路タル故ニ旅館ヲ此地ニ
構タル歟

忍照宮　昔ハヲシテル宮ト云シヲ今ハヲカシノ宮
ト云ヿナラハセリ　路畔ニ立　武庫川ヨリハ
三四町西十リ

家持

桜ゝ海さゝなみ　遠浦の海なし思ふ名ゝ
ゝ

鳴尾　崎ハ左ノ方海ニサシ出タリ村モ自路左
ノ海辺十リ

定家

乗載　年ふれハ那ゝの浦ゝ山ゝ
ゝ　同

後京　生田山ゝ

弁慶松　いのふとはらそにあるおれ沖つ波てこはめれ[illegible]

眞言

法の戒　秋葉久方おれ海れいのふく法華衣うゑぬ日を法

西行

常盤ゆも秋みおれ松のもゝ分て別れ上ものみて

法華法師

丈不　浦ふして会法華おれ泊め民松のもゝて千年ふる人あり

西行

京松　風次ハ宮屋の松れあのまのみとゝひの浦れ麻れ多ゝ

法華法師

汝のもゝ宮屋の松め常信て和田の入江れ出ある月を

津門村

此所ヲツトニハ昔多田満仲ノ息男義女丸ノ為ニ死シタル幸壽丸カ首ヲツヽミタルツトヽ云者流ル故ヲ村ノ名トスル由里俗ノ説ナリ首洗ノ池トテ村ノ内ニアリ

松原山昌林寺　村ノ内池ノ西ニアリ　淨土宗

此寺ニ源頼光ノ御影堂幸壽丸カ石塔アリ

角松原　津戸ノ西目海道北ニ少シ松原アル所ヲ云

名所ナリ　名次山ト云モ同所ナリ

高市連黒人

家妹子みゐなのハミをつ名次山角の松原いつの志めし

角ノ橋　小橋十リ

此川ハ廣田川ノ枝流十リ西ノ宮ノ駅ノ入口也

今津村

追分　自是右ノ岐ニ入ハ山崎通京ヘ行路十リ

大畧ヲ記之左ヘ直ニ行ハ西ノ宮ノ駅ニ

到ル

小清水旧墨　是ハ三好修理大夫城ニ

太平記ニ某師寺公義居トヽ云　観應二年十一月將軍

并執事師直兄弟ト石堂中務大輔同右馬助畠山阿波

守国清ト合戦シ將軍方負給フ太平記ニ委シ

昆陽　自西宮到于此　駅宿也

二里

昆陽ハ名所十リ　古哥多シ前巻ニ記之仍畧之

和泉式部

なのりそにはこゆとも人をしへきに惜てそかれぬしの世

後撰

仍之

歌枕
こやれ池 ほのしまの月に秋さむし浦をそよかぜの夕の月
茂持

歌枕
伊かの浦 ほのしらなみ煙たえ侘ぬしてそ寂こやの松もり

崑崙山昆陽寺　昆陽ノ駅ノ西中寺本村ニアリ

此寺ノ支前巻ニ委ク記之

追分　昆陽ニアリ自是左ニ赴クハ有馬路右ニ赴ハ京ヘモ大坂ヘモ出ル路ナリ

小濱

生瀬

有馬　昆陽ヨリ是ニテハ前巻ニ委記之仍畧之

瀬川　自昆陽到于此　二里

郡山　自瀬川到于此　二里八町

茨川　自郡山到于此　二里

山崎　自茨川到于此　二里

京　自山崎到于此　四里

右西宮ノ追分ヨリ是ニテハ前巻ニ記之故ニ畧之

西宮　海威寺ノ北路ヨリ見ユル
自尼崎到于此二里

西宮大明神　駅中ニアリ

當社ノ神ハ伊弉諾伊弉冊ノ尊ノ第三ノ御子蛭子神ヲ
祭処ノ神三座十リ　天照太神宮素戔烏尊　蛭子也當
社ニテハ蛭子ヲ本社トス毎年正月十日ニ祭礼アリ

南宮八幡宮

背ハ社領モ有ケレトモ今ハ神領十ニ但尼崎ノ城主ヨリ
私ニ三十余石ヲ寄附ト云云　天文三年兼應二年ノ火
上ノ後御再興天和年中ニ御修復

仲夷　荒夷自路左南ノ海中ニ

神社考曰
俗称蛭児為西宮夷三郎又号澳夷
日本記曰伊弉諾伊弉冊為夫婦生蛭児使載葦船而流之
又曰蛭児雖已三歳脚猶不立故載之天磐櫲樟船順風放
棄
旧事紀第四大巳貴兄曰事八十神兄弟共欲嫁因幡国八
上姫大巳貴為奴而行事八十神亦負袋而行於是大巳貴

以兎為媒得八上姫幸八十神大恨云云八十神西宮ノ五ノ
神之中之
神社辨覽曰　蛭児　夷殿
世流布以為混同之蛭児者天照太神兄弟之載方冊而分
明之夷殿説拾遺神低云口授之一條也云云又案今人家
以大黒而配當于此神之義今古不分明之蓋一箇口傳故
尊尚得博達之師可責焉
二十二社註式云垂跡時代無正記云云　又三十番神註
曰人皇十五代神功皇后二年壬午年以山背根之女葉山
姫祭之
今存兩説之覽者可研窮矣ト云〻

或ハ曰ヒルメ天照大神ニつぎて今ハ此ヒルメをもとめたてまつるに
おやすめて四神ハ御まつりて尺まきたつのそを拾立て東向
御門ハりれを入て南に八幡ヒルメハ南ヒルメと以上流
社南社ヒルメとそれなりとおもひ東ハ西
一所もてのり引て南ヒルメ小一所西ヒルメ間とこ流
御松の元本ハりお社ハ南向ヒルメ向ハ三ヒルメ幣見て思
ひ神素盞嗚尊ハ神お屋御まつりて五ヒルメ三ヒルメの
洋屋ハりの神ハ御三十ヒルメ四方の池ハりの中島御弁天
社ヒルメハ池の東御五ヒルメ三ヒルメ社神ハ中堂ハりの西御宮
殿ハりお屋ハ本社社東御ハりの小御末社ハりの日ノ宮と
以南ヒルメの歩ハ西ハ宮ヒルメの道を通て三十間ヒルメの
小ニハりの松杉お屋久ヒルメ立ヒルメ小ヒルメ社南神

西之庄三郎屋とゝ伊柴法伊柴再の者の夫婦し給ひ
幼児をうしなひ三宝の加護にて祈願されい天の願
様初穂のきてこのまゝ捨られ給ひ市神なり
手向申ものとーてと久市神
ちつをんち

さてこの市久日に西のゝ西のゝ宮に神れ宮お社造営
世代古久元いにのことくこゝ沖社前表とて海辺あ
市社ほり神代のと我ひいせめて
たゝ神れ前様初穂高えて神ハ海辺にをれ事久
これ市社をき所を市の海とゝ沖こ久社をせ久原を
見る

治承四年三月言金言いつ久一向浄土の陽云上畧
西宮社へいをを祈はゝ神のゝ市
たこう比ゝて市ゝをぬ市こてゝ
てみかつのうまつかをとに知久市社をの松知ゝ
ハぬかみ乃高いそ久いつこの家れぬ市ゝ
いつ久と元日ゝ山川をうちすれを市と西知者
西宮社前ゝて法施ゝて市ゝ
この市ゝへ久をしそいゝ中さ法ひつこの附ハとゝ
山坂みつこを祈

能勢丹雅頃乃記録ゝ
三市の屋ゝ西の宮ゝ西の宮ゝ毎ちゝ
ハ市ゝ

社のことなり事ハ[illegible]

尊氏卿都落ノ時源義貞来テ陣西宮ト云ヘ太平記ニ委シ

蛭児ノ濱　西ノ宮ノ社也ヲ云古哥アリト云ヘ

御前ノ沖　西宮ノ沖ヲ云御前ノ濱トモ但廣田ノ社ノ御前ノ御前ナル故ノ名ト云ヘ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

廣田社　西宮ヨリ北海ノ右ノ山際ニアリ

此社ノ支西宮ノ社ト同一ノ様ニ神社考ニモ神社弁覽ニモ載タリ然レ氏別社ヤリ但神社考ニハ西宮ト廣田分テ載之事ハ十神ノ一西宮ト一所ニ記之神社弁覽ニハ廣田ノ条下ニ蛭児ノ宮ノ一ヲ書入紛ラハシキ事ニ

當社ハ五社之所謂廣田　住吉　諏訪　八十之大明神　八幡　是ニ本社ノ日本記ニハ　天照太神ト記セリ

凡土記ニハ　神功皇后ト云ヘ

社領ハ尼崎ノ城主ヨリ水田二反ヲ奇附セラル

紙珠ハ廣田ノ室物ヘ

神社考曰

廣田摂津　俗号西宮

日本記神功皇后征新羅之明年忍熊王起兵屯住吉皇后聞之還務古武庫之水門而卜之於是天照太神誨之曰我之荒魂不可近皇后當居御心廣田国即以山背根子之女葉山媛令祭之

凡土記曰人皇十四代仲哀天皇將攻三韓到築紫而崩今気比大明神越前在敦賀者此帝之其后神功者聞化五世孫息長宿祢女也於是発軍伐三韓時當于産月取石挿其腰裳欲不産之遂入新羅高麗百濟皆悉臣服帰到筑紫産皇子是誉田天皇之皇后到摂津海濱北岸廣田郷今号廣田明神是之故号其海邊曰御前濱曰御前沖卜又埋其兵器曰武庫今日兵庫其誉田天皇者今八幡大神也

如意尼天長帝之妃也修如意輪供夜空中有音曰摂津有宝山号如意輪摩尼峯昔神功皇后征新羅而還埋如意珠及金甲冑弓箭宝剱衣服等故亦曰武庫閑聞目見之天女乗白竜擁白雲向西南飛去天女大弁才天之白竜変石像今猶在此地又是役小角之旧趾之天長五年二月如意尼与宮女二人著摂津南宮浦下舟詣南宮神祠

神啓殿戸与妃昭語而二女得見餘不知此日又詣廣曰
神祠神又開戸宛如南宮次日入山山西北有池々中出
五色光池辺皆白石似玉摩尼山前有小峯逢大蛾於此
進而登摩尼峯紫雲来覆有一美女来曰此山田究竟摩
尼霊場四神相應之勝邑之我蔵珍宝於此地毎日曷中
我降此地宜立道場言已之如下山不見是廣田神之化現
也妃大喜営搆梵宇

神社辨覧曰

廣田　延喜式神名帳云摂津國武庫廣田社

天照太神荒魂云云

又五座說

一殿　住吉大明神

二殿　廣田大明神　是神功皇后之

三殿　八幡太神宮

四殿　南宮　私云蛭児神欤

五殿　八祖神　私云事八十ノ神欤

右說中不顕本縁者蓋但未盡美者乎雖然百一代後小松
院御宇伯資忠卿淀欤本縁之無正說而朝求夕尋以雖
窮髄脳号尚不出臆中故今亦不明註記也

蛭児　夷殿　下畧記前

私曰今俗ニ云澳ノ恵美酒ハ蛭児神祠ニテ
南宮　廣田ノ宮ト云ハ西ノ宮ナリ

後鳥羽院御宇於當社有哥合判者ハ皇太后宮大夫俊
成也世ニ是ヲ廣田ノ社ノ哥合ト称メ一巻アリ

廣田社秋の哥あらあらし
　　性阿法師

廣田なり淡路なるあてこそ淡路の磯にさらす人
　　宗長入道

弟後拾遺　ふるまいはめ之ニ廣田社神あまのきん
　　和泉

古今集　ほとゝぎす廣田の淡路の磯にあらはれ
　　貫之

文本　何もれ身を廣田乃浦あいのみありても今いのちあり紀ノ
　　惟宗廣云

同　人ハ皆敬ふ者也　神功廣田の浦ゑ帰さ給ふ
　　宮

摩尼峯山神呪寺　神尾邑ニアリ

本尊ハ観音也

當寺ハ淳和帝ノ后妃ノ開基トリ后妃ヲ号如意尼常

如意輪観自在佛ヲ深ク信シ給ヒ神ノ告アルヲ以テ天
長五年二月十八日潛ニ王城ヲ出給テ侍女二人ヲ召具
シ坎摩尼峯山ノ霊場ニ登テ坎所ニ一宇ヲ建立シ神呪
寺ト名付給フトゝ委ハ元亨釈書ニアリ

高武蔵守師直　同越後守師泰生害ノ地ハ下大市村

ノ辺ニアリトゝ

観應二年二月尊氏直義振旦ニ下向シ師直師泰ト合
戦アリ高家利ヲ失テ將軍家降ル赦ヲ得テ兄弟則
剃髪ス師直ヲ道常ト号シ師泰ヲ道勝ト称ス廿六日將
軍家帰ノ刻彼入道等モ給テ登リケルヲ武庫川ヲ渡リ
小堤ノ辺ヲ通リケル時令誅殺トゝ太平記ニ委シ
観應二年二月ノ合戦ノ後將軍兄弟和睦シ給ケルコロ高
師直武庫川ノ小堤ニテ三浦八郎左エ門カ中間二人シ
テ師直ヲウチシテ太平記ニ委

甲山　自路右ノ大山十リ

形甲ニ似タル故ニ号ス此上六甲山トテ大山アリ是ハ神
功皇后新羅國ヨリ還リ給フテ如意珠及金ノ甲冑弓
箭宝剱衣服等ヲ埋ミ給フ故ニ武庫山ト号ス又或ハ
甲六刎ヲ埋ム故ニ六甲山ト云
此山ニ竜神ノ岩屋ト号スル所アリ此戸ノ開ハ晴天モ
忽ニ雲霞テ雨天トナルト里俗ノ傳ナリ

延文ノ比吉野ノ將軍宮ト申奉ルハ故兵ア々親王御子
御母ハ北畠ノ准后ノ御妹ナリ此宮ヲ赤松律師則祐正
平七年ニ支ヲ講リ宮方ニ參シトキ大將ニヤ下シ進セ
メリ則祐忽ニ心変シテ武家ニ參シカハ宮心ナラス京
ヘ上ラセ給フ呂人ノ如クニメ御座アリシカ但馬國ノ者
ニ盗出シ奉テ高山寺ノ城ヘ入奉リ本庄平太平三御
手ニ属メ但馬丹後ノ両国ヲウ千従ヘ播ノ國ヲ御退
治セントテ山陽道ヘ御越アリシヲ則祐三千余騎ニテ
甲山ノ麓ニ駈向テ相戦軍未決ニ本庄兄弟数ヶ所ノ疵
ヲ蒙リウタレニケレハ宮ハ河内ノ国ヘ落給ヒケリ

武庫山　大山ニテ六甲山摩耶山ニツヽキタル山ナリ

基氏

詠歌　津のくにの乃むこのおとなかるらしもとのくにたちてたゆたふ

為兼

拾玉　伊吾礼ハ武庫の浦れなれハ庫乃ゆきとれハ武庫の山を

同

本のもとくもこれ嵐立ぬらしいかの水乃沖の白波

公相

文本　播磨ノ海ヲ漕ケレハ武庫山桜ハ雪ノ如ク

大補

同　秋の夜のむこの浦の月もあはつりの浦にすまの島

同　与文書ノ武庫ノ嵐立て月そ之ハ為紀ノ大ふ松さ

同

榊とるもこの山風さえて社も声澄ぬ音婦りにけり　道因法師

鷲林寺　鷲林山ト云六甲山ノ辺ナリ

仁花天皇七十四年ニ建立シ給フ今ハ漸々ニ絶ハニテ総ニ民屋二三軒アル所ニ其名許ヲ残セリ

武庫山平林寺　小林ノ里ニアリ

本尊観音ナリ霊地ノ由

兎原郡

打出　或ハ宿川原ト云　江州ニ同所アリ

名所方角抄ニ云打出浜ハ山ハ東ハ海なり西の道より十八町西なり小清水といふ寺あり此へしる道也東より芦屋へ出ては海辺にて京の西なり京より十三里と云々

私曰此赴此所ノサてニ皆アヒタリ但シ海辺ニ出ル始ト書タルハ山崎通ノ陸路ヲ経テ小清水ニ到リ此処へ出ル時ノ事ナリ

尊氏御京ヲ落テ西海ニ赴キ給シトキ御舎弟直義朝臣此処ニ陣セラル太平記ニ委シ

阿保山親王寺　寺出ノ町ヨリ北ノ方三町ニアリ是ハ平城天皇ノ皇子弾正尹二品阿保親王ノ廟所ナリ今浄土宗僧守之昔ハ天台宗ノ由此寺ヲ此処ニ建立スル故ハ親王ノ領ニテ行平業平マテ領ス其比當寺建立欤

追分　在寺出親王寺ノ北辺ニ鳥井アリ此鳥居ノ下ヲ行ハ有馬路小清水ヘ出ル

小清水　有馬　此路ハ一前記之

建武ノ役ニ畠山阿波守国清自湯山山越ニ出テ寺出ニ陣スト八此道ノ一ノ太平記委シ

幕屋川　川原廣ニ歩渡

鵜田跡　川原ニアリ

是ハ近衛院ノ御宇仁平ノ比源三位頼政カ射敵シタル鵺ヲウツホ舩ニ入テ流シケルニ此成ニ流カヽリテアリシヲ塚ニ築コメタル由之ト古老ノ傳ナリ

行町　是芦屋ノ里ナリ名処之自路右ノ方此ヲ芦屋ノ里ト云南ヲ濱芦屋ト云芦屋ノ灘ト八濱芦屋ノ南ノ海ヲ云　但芦屋八此辺ノ惣名欤

里俗傳云北処ハ阿保親王ノ五男左原中將業平ノ領知ナリ度々下向シ給所ト云云

伊勢物語ニ曰

むかしおとこはのくにまでまかりけるに　かのやどりのあるじ　かしこまりていとあるじとりまかなひけり　あるじのおとこ　はるばるきぬるこころをやすみとや　思ひけむ　なまめいたるいとなりけり　さかなとりまかなひ　さけのさかなにはこれやこのかはのほとりにおほくなりにけるとて　をんなのかはらけとらせてよめる

これやこのあまのかるもにしほたれつつわびしらにとはばいかにこたへむ

とよみてかはらけのしたに　書つけける　ときはやまこえのあらしにたまちるはあきのこのはのかぜにまかせて　下略

万葉九

なにはがたおきつしらなみたちくるのみてくるしてい神のこえ

後撰十

なにはがたこもりにのみしてしらなみのいつちよりくるこまにまさるを

拾遺十

いまはなにはがたこもりにのみしてしらなみのいつちよりくるこまにまさるを

能因

伊勢物語の上書

をちかたにこの家の遠くかすみ日ながれぬやとりはこのうしろやまにいとうとくもかすみおほひみもかすみこのかはのほとりにたちてこれをもむ

とあるあのほとりの川の名ともに表徳のうしてひのとこしてなにはのかはのほとりにたちてこれをもむ

とあるのしそれ家乃あのとおもいてうしろ知みかはのみて

ちせらましと侍ひろひて心ざしうちあかれにきて女この
さとわすれ侍るを女このつきみえわてこのしまたとおもひ
ひて心うしあはれ人のためのこのみ
まさつのみすのさしますすと心もふかり君のみあはれなるしまさりけり
心ある人の分みは須磨の浦も知らぬとよ
俊成
新勅撰 ともすれは須磨の沖の浮子にも菱路はしらぬ我なりけり
家隆
続古今 いつもかくさひしきものかつのくにゝ須磨の里は秋の夕暮
為家
同 明潟須磨の浦はるかに深きのたに見ゆる紀路の山

続後撰 須磨の関月をむかへ浦の戸にあかしのさえ波漂ひにけり
後嵯峨院
同 春は又夜須磨の浦に帰る人須磨のあかしの夜のみのまゝ
丹後
新千載 紀つなき家もむかふ須磨の里は袖の月の影
知家
新後拾 今宵にいめ須磨の人も知る須磨の里に春なるらん
雅世
新続古今 浦のとま家須磨の夜やさむき須磨の里に衣うつなり
定家
拾遺愚草 須磨の関の里のむかひにそ桜深き雲のかゝるらん

拾玉　　慈鎮

行とはなしに心をしるべにて袖さへ濡るる河せの里の松の中風

同　　水茎次もとこれ山風立ぬらし河せの沖の白波たち初

　　無氣

建保四年　　つかりて多年この文らんつのくに乃河せの里の蛍の子

　　定家

中書集　　これとなほ蘭乃うをにうれ乃侍れ夜ふけ侍れ里

　　後京極

文本　　あしの葉なる乃塩せる帳河せ中の浦の人

　　為家

同　　白波乃河せ乃沖の月とて乃て廉の目さそふ風をそすす

同　　山堂記本編仏寺にて河せ乃里に姫松のそなへ

同　　河せの里乃入江にとなる蛍乃侍れ乃侍れ

　　後九條内大臣

同　　河せの里乃の山乃子みなうらなれ乃ゆ乃て乃ゆまを布引の滝

　　雅経

同　　久されを秋せ乃松を吹こをにあらうちそよ乃河せのさと

　　公道

同　　和泉式部乃仲を行初乃乃ゆめ乃野乃の乃らとそ乃る

式紀行に曰蓮れ杉をとりて何かの星にたぬ（リカホ）
宴そ業平乃つあれをそしてうたれ尼ぬれ
浦にらせられ浦をひろひあつして哥をよみしとこ
ろあり さとい浦にいらたるとり七八町を隔てて小
れ山浦にあむいりの浦いつくしきひしこの久さひしたるれ
とらみしに多のうちて秋あり移てもれさひて尼ぬ
のうたをうたをいりて家もむのうちに隔てをうて
ひろれ子乃なりみのうせをうるうたをひろひて隔てのかのさと

藤栄屋敷　芦屋ニアリ　公光モ此所ノ人ト云ヘ

松巫ノ日記　自路右ノ方ニアリ　是山路ノ城ト云ヘ也

此辺ヨハ山路ト云庄ノ名ヘ芦屋ノ行町ヲ出テ二町許
ニシテ右ノ山ノ手ノ田中ニ赤松判官信濃彦五郎再山
トカケ持ノ陣所トテアリ

太平記ニ曰康安二年九月和田楠神崎ノ橋ヒニテ其浦次
郎左エ門ト合戦シ大利ヲ得テ摂州ノ敵ヲ追落ストイ
ヘモ赤松判官信濃彦五郎兄弟猶丘庫ノ北十ル多々部
ノ城ニ籠テ兵庫湊川ヲ管領スト聞ケレハ九月十六日
石堂右馬頭和田楠三千余騎兵庫湊川ハ押寄一宇モ不
残焼拂フ此時赤松判官兄弟ハ多田部山路ノ二ヶ所ノ
城ニ籠テ敵掛ラ馬麦ニテ戦テ勝利ヲエシト待カケ北
楠イカヽ思ヒケンヤカテ兵庫ヨリ引返シケレハ赤松

出合ニ不及野伏少々城ヨリ出シ遠失射カケメル計ニテ
ハカ〳〵シキ軍ハ十カリケリ京都ヨリ武家ノ執事尾張
ノ大夫入道大勢討手ヲ下スト聞ケレハ和田楠又尾
崎西宮ノ陣ヲ引テ河内ノ国ヘ帰リヌ

観應二年二月将軍ト石堂中務大輔同右馬助畠山阿波
守国清ト小清水ノ合戦ノ後松延城ニテ戦ノ一大平記
ニ委シ

溝井村

左ノ濱辺ニアリ

住吉川原

歩渡十リ

元原住吉大明神

垂路年代不知略畔ニアリ海ニ向テ立

里俗ノ曰ト部兼直ノ哥ニ
あしの海橋の恵れたゝ波をりかけ〳〵れ住吉の神
是ハ此所ヲヨタルト　如何猶可尋之

飛多井姫明神紀伊にいもゝ久いもゝ世ゝとゝ
いふ社あるなとゝ也ゝ
ゝ
ゝをうみて

猿人の由知の道社俗あるいはこの手紀いもゝ住吉
粒云待浦中ゝ浦〳〵とて過ぬと云

雀松原　住吉ヨリ西御影村ニテノ濱辺ノ小松原ナ
云昔ノ松トテ一本アリ

此所ハ観應ノ比茅師寺次郎左エ門公義カ陣處ナリ
太平記ニ見エ

花香井雅船新后の紀行にいもせとすしのまくらの
ゑりにむすびに雀の松原一村久かりて
又まゝ一村久かる松原ハ名さまくめれ称ら成
といひまてゝ引下略

御影川　或ハ石屋川ニ世々称スル御影石ハ此山
中ヨリイヅルト

或ハ又兎賀川ニ云昔治兼ニ高倉院嚴嶋御幸ノ時入道
相國此北山ニ頓宮搆テ入奉ルト云傳フ

言舎殿乃嚴島詣の紀のいもせ久西れ文れ茅ぬつく
法施ゑてまつりて多ゑ[illegible]この川[illegible]の一流へ紀をしそ
いのりゝ中さるいつ[illegible]れと紀とのれ山川よつのを多ふ
四方の海を浅みミかしてゑあの三子世男えのこゝん
と見へまりこれ[illegible]ハ[illegible]の法[illegible]ゆつりてゆのてゑを
法ふ

花香井雅船新后の紀行ゑ
とこの川とてみゑ法らゆいつ[illegible]川ゆり
いのゑりしゑこゝりゆりてゑ法ゑ[illegible]のとこの川のゆを

御影村　自路南ニ杜アリ神社アリ

此杜観應ニ茅師寺公義カ陣ト云

名取方角ニ松ノ歳経松原ノうち有り

社ノ内ノ天神ノ内ニ生ル南向ノ海辺ノ海辺有り

山なり

義経　ニ弁慶ノ又ノ内ニ生ル弁慶ノ松ト云ふ

武記ニ弁慶うたれたりしとみえたり大四神ノ社ノ内ノ生南ニ内新

村と云ふ所ニ弁慶ノ生ル松ハ拾ヲ本ニ成

源俊新ノ内ニ生ル松ハ拾ヲ本ニ成

一ノ松ハ二ノ本ニ成

ものさめ原人ハ名所ニハ

太平記曰観應二年ノ春尊氏卿伯耆ノ高山寺ノ城ヲ攻ラル其比摂津國ノ守護赤松信濃守範資使者ヲ以テ申ケルハ八幡ヨリ石堂中務大輔畠山阿波守國清上杉蔵人大将ニテ七千余騎光明寺ノ後詰ニ被差下前ニハ光明寺ノ敵城ヲ堅ク守リ後ニハ荒手ノ大将カ、リ十ハ由々敷御大事ト覚候其城ヲ罰テ討手ノ下向ヲ相支ヘ神崎十林寺小清水ニテ御合戦候ヘカシ敵ノ敗北無疑ト申ケルハ二月十二日将軍モ執支兄弟モ同十三日ニ

兵庫湊川ヘ駈向ハル畠山阿波守國清播广ノ東條ニ有ケルカ此支ヲ聞テ湯山ヲ南ヘ歩越ヲ出ノ北十ル小山ニ陣ヲ取石堂右馬助モ光明寺ヲ歩捨テ皆畠山カ陣ニ馳参ル同十七日將軍師直兄弟二万余騎ニテ御影ニ陣ス

此後萩ノ松原ニテ茅師寺公戈支小清水ノ合戦松巫ノ城ノ下アリ小清水ノ合戦ニ將軍方負テ引退ク

太平記ニ委シ

一尾山十善寺

御影村ニアリ

本尊観音霊區之由當寺不和来由猶可尋之

乙女塚

石屋川ノ西道南ニアリ和泉二郎塚丹波太郎塚トテ三ツ並テアリ

太平記ニハ求塚ト云リ或ハ男女塚乙女塚共西説ノ由万葉集ニ云菟名負處女摂刀ノ人之二人之壯夫ノ一ノ姓ハ菟原摂刀乃人なる一乃姓ハ血沼泉刀乃人也二人同心挑處女淫乎用未嘗一日到其妻弦ゐ妻め守ル我不從父母教之曰一夫ニ隨フ時一夫自退汝撰可若何使人苦悲如此乎妻ゐ曰若二夫ノ士ノ念有浅深則我從其深弦苦二者志肝膽乃切ナルヿ更ニ無優劣我以是無如之何於是父母営水臺於生田川上招二士云二夫乃求婚雖心到以一女之身難事二夫今乗二士乃射藝而後欲

定対請射水上島我撰其中者定姻矣二士喜実称我意矯
放失一ヶ中首一りハ中尾於是處可和歌而曰

處女

任ひぬ家分なをてん使ふ國の生田川ハあはてそ生ん
如斯吟自水臺投身溺死二士驚懼而又同入水一りハ取女手
一りハ取女足共溺死ス處女父母大哭葬之二士ノ父同来之哭
スルヿ原葬之謀ヲ處女同宅苑原氏又曰同里男女同境臺
可ニ泉州人何葬佗邦血沼氏又不得止盛泉州之土小舩轉
送摂州自築長夜臺處女墳側三墳累々俗謂之處女
塚云ヽ

大和物語云
昔津乃国にすむ女ありけり男二人なむ
ありけるをいとりてはそのもの男ハ姓いやしきなりなむ
あるはけ泉いまひとりハ和泉の式部人にをんなあ姓ハちぬ
となんいひけるとてそのをとこともとりよりはしめ貌人
のほとにすをりてをりけるをんなありけるのまをんな
あてそハけるもあとをうハにつきをあ
やうなるをまをもろともにねけるひぬをとをれて
まををあやうにをこをそいつまアをれりといふを
もけるをはあやひうるひぬこれ人のこころさしのお
ろのをもをいつれにもあるをんなをもこれもこれも
月日ををて家のをとにをち帝をうつををををを

尺寸あまりれも寸とぢぬこまとりあしをあり
やうにをこせ侍りのとしとりあしれれといふ
りもちこあまりさてり形やゆゆわこあまりこ尺ふ侍しく
年月をへこあまり人のあまりれをいつつにやふいとを
ひとりくにあひたなまいこあまりこのやひいまこあんと
いふに女こあまりさやふに人のこころまこのをあーやう
あふみなむやひうらひぬ侍やこえこあまりこあまりといふ
にきのうこいく多川のつあみひらちりをうてのみたり
うれそやうらひ人ともをよひにやりてをやいふ
やーまれそみこあまりこのおれしやうあれそれをそ
あれりのあむやひまうらひこあまりこ侍侍あふ四つにそれそ
のこあまりこあまりこあんあふいとを侍人
をーれわさありりといふとれあいとこうこくとろこひの
ほやあふやれ川にうれこあまりうあ
多をいふ侍へまきをいつこあまりあうんに人にをんといふ
とれあいとうれこあまりとありといひこあいふ侍ほとにひとふ
うらのうをいついまひとりあをのうをいつそれこのえ
いつまをいふへくもいうぬあまりこあまりこあまり
侍をひぬまこのあおけてんはのゆ乃生四の川ふあのこうう
とをみてこのひらちりふ川あのをみて寸ふりれをつくと
落いわぬをあいふいまをふいれこあまりをふ侍ほとにこれよふ
男ふこれやこあまりをあーふあみ落いわぬひとりあふあーを
とをへいあひとりふ寸ふ侍とうへこあまりこあまりそれえあをや

いみしくさいはひあるものとわたをまきたるのくしわてをしつゝ
男ともものおやも妻もかなしみあへりこれ女のつのかうもちに又
たくのともを作めて浮わうむとかはかはかなにのをと
このをやいふやうおかしくにはおとこ絵こゝをおかしと
ろにいせめことくにの人のいつこのこのしのちをも物
のたへかといひ寄さうしとかはいつみのうつれ
をやいつみのをのちをふるにをこひ寄こゝあらゝ妻かゝむ
ついみうつみ寄ゝかはせれた女のものをもゆ寄ゝ左右ゝ
かむ男のつゝともいつとゝ思ふことゝのむとり
をゝかたを語みかこの妻かたきの妻人のをわ
とわ者れをこまこうくをみかへ人ゝこの人みゝとわてよゝ

伊勢乃浦乃海人の子

この者とのみ形ゝ下寄ゝをとをかこうゝこひ寄ゝ
女にかわ語ゝ女一乃みこ
この妻わ多くゝ深ゝつあ所乘西絵ゝ妻ゝ所人ゝ尼ゝ人ゝ
又ゝ

いつこゝこの玉絵もとめんもつみけてうこともをもほゝ寄
兵衛の命婦

はこのももりともみて寄ゝ人ゝ尼ゝぬゝ
いと所の別者

このもゝ下けもかゝ寄ゝ寄ゝたゝ君ゝあらわ
いゝ妻ゝあわしをわ女にかわ
あふこと絵のうたにゝ所かよ所の玉つうふとゝ者そうかし

又人

ゑをかけ申候ゆゑ人ゑ繋て祝とう紀ゑ、永にのけをあら
又いはひとりのをとこゑあわ申
をかゝえゑをもいられし紀中ゑれと秋とのゝ繋らさわん
花一如
うゝわ名ゑはるのみかるこを落のゝ入る繋れをうゝ子ゝ
又ひとりのおとこにあわて
秋とのゝ繋らにかゝうかゝ一えに住いうれし紀ゝ紀いとそ景
をこゑゑこれをとこゝ景世れらふ心の紀を紀わてうゑ紀しぬ
をう波志波しをひゑとおいまこゑをうつみ名ゑいはひ
とりをろゝの波をゑゑゑ波わん名させゑをゑ波わ名ゑ
のけつのけ紀をゝをとゑつのとそいひゑゑ波ゑ波ゑ
人のこれつけとにやとわうゝ波ゑ人のいをこのひ
ゑ波をとの志名れをあゝとゑひ子見をゑれて波
ゝをもゑしといひ名れをゑのゝ一とゝ祝ふ
ゑしゑゑ四ゑ子みをしゑ波男子ゑ紀てひそゑ波
波紀ゑ波ゑのをこんゑゑをゑ波ゑ波ゑこの
ゝ志ゑをゝ波ゑ祝ゝ紀ゑ波ゑ波ゑ波ゑ
いをゑおゝをゑしとゑ人とゑ二ゑ名ゑゑ申見ゑゑ
ゑんと見ゑとゑゑ八波ゝとゑせゝやゑて名ゑ
ゝをゑわ紀ゑをいゝゝゑ紀のゝとゑいをこのゝ波ゑ
志をしゑわをしゑれをとゝ紀ゝ二ゑいゝゝゝゝ波
ゝひゑ波ゑとゝ人ゑとしゝゝ祝ゝ紀ゑのゑゝし波ゑ
ぬゝ波ゝゑゑゑの紀波ゑゑゑゑ波ゝとゑゑ波ゑ紀とゝこ

ことをしめすなりつぎ[illegible]とも[illegible]つけしと[illegible]とめ
らし記ることなれいとゝ[illegible]塚とに抜もぬけられも人
もおしいなにみきたつこのもとれ血あるとなん
なるれしかあらはあちかゝ血法[illegible]なんいかりは
いとうとはしとをはあ[illegible]ことなれと人のいひらまこ

或記ハ曰みちよりの一町ハかうあ南に男女塚ハ[illegible]田
をとこのつか窓しとゝみし塚ハ[illegible]にハあちぬ
おとこ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
女乃塚を中にしてこつあらひてハあ乙女塚男女塚
の支説ハあ一ハ[illegible]女の塚を乙女塚とハ二人乃
[illegible]のつかを[illegible]塚と云女の支[illegible]に[illegible]
[illegible]

[illegible]

茅渟男小井田男ハ奥城の中にをとめの塚ハ[illegible]あ

摩耶山　自路右峙タル松山ヲ云　山寺観音堂アリ
　　寺アリ

切利天上寺在摩耶山号佛母摩耶山本尊ハ観音十リ
此霊像ハ釈迦如来ノ御母摩耶夫人ノ護本尊ヲ安置ス
本堂ハ南向ニ立
梁武帝ノ一カ三礼而作給シ摩耶夫人ノ像アリ堂ハ東
向ニ立此夫人ハ善覚長者ノ娘淨飯大王ノ后妃十リ
平城帝大同年中ニ此地ニ移サルトヽ云當寺ハ真言宗

也八坊アリ寺領十石 御朱印地昔ハ寺領若干アリト云

岩屋ノ開基ハ法道仙人也法道仙人ノ一ハ印南野ノ内法華山ノ条下ニ記之

此所ハ元弘年中ニ赤松次郎入道円心ノ陣所之城墎ヲ本堂ノ辺ニ築クト云々

先帝已ニ船上ニ著御成テ隠岐ノ判官清高合戦ニ手負テ後進國ノ武士ニミナ駈進申出雲伯耆ノ早馬頻並ニ手ヲ六破羅ヘ告タリケレハ支已ニ珍事ニ及ヒスト聞人色ヲ失ヘリ是ニ付テモ京近キ所ニ敵ノ足ヲタメサセテハ叶フマシトテ先摂津國摩耶ノ城ニ押寄テ赤松ヲ退治スヘシトテ佐々木判官時信常陸前司時知ニ四十八ケ所ノ篝火在京人并三井寺法師三百人以上五千余騎ヲ摩耶ノ城ヘソ被向ケル其勢囲二月五日京ヲ立テ同十一日卯刻ニ摩耶ノ城ノ南ノ麓求塚ハ幡林ニソ寄タリケル赤松入道是ヲ見テ態ト敵ヲ難所ニヲヒキヨセン為ニ足軽ノ射手二三百人ヲ麓ヘ下シテ遠失ヲ々射サセテ城ヘ引上リケルヲ寄手勝ニ乗テ五千餘騎サシモ嶮シキ南ノ坂ヲ人馬ニ息モツカセス操ニモミテソ拳タリケル此山ヘ上ルニ七曲トテ嶮ク細キ路アリ此所ニ至テ寄手ヲシ上リカネテ支タル所ヲ赤松律師則社飽間九郎左エ門尉光泰二人ノ尾崎ヘ下降テ失種ヲ不惜散々ニイケル間寄手ヲ射シラマカサシテ互ニ

人ヲ揃ニ成テ其陰ニカクレント色メキケル気色ヲ見テ
赤松入道子息信濃守範資筑前守貞範佐用上月小寺
頻宮ノ一堂五百余人鋒ヲ双ヘ大山ノ崩ルニ如クニノ尾
ヨリ出テ出タリケル間奇手アトヨリ引立テ返セト
云ケレトモ耳ニモ不聞入我先ニト引ケリ其道或ハ深田
ニメ馬ノ蹄ヲ過或ハ荊棘生繁テ行先弥狭ケレハ返サ
ントスルモ不叶汐カントスルモ使ナシ城ノ替ヨリ武
庫川ノ西ノ緑ニテ道三里カ間人馬弥カ上ニ重リ死シ
テ行人道ヲ去リアヘス向フトキ七千余騎ト聞シ六波
羅勢僅二千騎ニタモタラテ引通シケレハ京中六波羅
ノ周章不針金然敵近國ヨリ起テ麾隨タル勢サトテ多
シトモ聞エ子ハ縦ヒ一度二度勝ニ乗トモ何程ノコカ有
ルヘシト敵ノ分際ヲ推量ニテ引共拠ヲハ不失カヽル
所ニ備前ノ國ノ地頭御家人モ大畧敵ニ成ヌト聞ヘ
ケレハ城ヘ室テ討手ヲ下セトテ同廿八日ニ又一千余
騎ノ勢ヲ差下サル赤松入道耳之勝軍ノ利ハ謀不意ニ
出テ大敵ノ気ヲ凌テ須臾ニ変化メ先スルニハ不如ト
テ三千余騎ヲ率メ摩那城ヲ出テ久々知酒部ニ陣ヲトト
リテ待カケタリ三月十日六波羅勢既ニ瀬川ニツキヌ
ト聞エケレハ合戦ハ明日ニテソ有ンスラントテ赤松
ナ油断シテ一村雨ノ過ケルホト物具ノ露ヲホサン
ト僅ナル在家ニコミ入テ雨ノ晴間ヲ待ケル所ニ尼崎
ヨリ船ヲ止テアカリケル阿波ノ小笠原千余騎ニテ押
寄タリ赤松纔ニ五十余騎大勢ノ中ヘカケ入面モフラス

タ、カイケルカ大敵凌クニ叶ハ予ハ四十七騎ハカタシ又
子六騎ニコソ成ニケレ六波羅皆シルシヲカ十タリ
ステ大勢ノ中ヘ汎ト交リニテカケマハリケル間敵カ
レヲシラスヤアリケン天運ノ助ニヤカヽリケンイツ
レモ無恙シテ小屋野ノ宿ノ西ニ三千余騎ニテ引ヘ
タル中ヘ馳入テ虎口ノ死ヲ遁レケリ六波羅勢ハ
昨日ノ軍ニ敵ノ勇鋭ヲ見ルニ小勢ナリトイヘ氏敷キ
難シト思ヒケレハ瀬川ノ宿ニ引ヘテスヽミエス赤松ハ
又敗軍ノ兵ヲアツメ殿シタル勢ヲ待ツロヘンタリシニ
不慮ニ陣ヲ阻テ雌雄不定丁壯ノ口ニ軍旅ニツカレ
ナハ敵ニ気ヲウハ[illegible]ヘシト同十一日赤松三千余
騎ニテ敵ノ陣ヘヲシヨセ先支ノ林ヲ伺ヒ見ルニ瀬
川ノ宿ノ東西ニ家ニソ旗ニ三間流指ノ尺ニ翻シテ七
勢二三万騎モアラントト見エタリ御方ヲ是ニ合セハ百
ニシテ其一二ヲ可校トハ見エシ子トモ戦ハテ可勝サナ
ケレハ偏ニ只討死ト志筑前守貞範佐用兵庫助範家
宇野能登守國頼中山五郎左エ門尉光能飽間九郎左エ
門尉七騎ニテ竹カカケヨリ南ノ山ヘ步裏リテ追出タ
リ敵コレヲ見テ楯七騎ノ人々馬ヨリ下リ竹ノ一村流
リタルヲ木楯ニ取テサシツメ引ツメサンノヘニソ射タ
リケル瀬川ノ宿ノ南北三十余町ニ扣タル敵廿五騎射
落サレタレハ矢面ナル人ヲ楯ニシテ馬ヲ射サセシト
立カ子タリ平野伊勢前司佐用上月田中小寺八木衣
笠ノ若者共スハヤ敵ハ色メキタルハト胡籙ヲ叩キ勝時

ヲ作テ七百余騎書ヲ並テソカケタリケル大軍ノナヒ
ク僻ナレハ六波羅勢前陣通セトモ後陣不續行前ハ
狭シ静ニヒケトイヘトモ耳ニモ聞入レス親ヲ捨郎
ホハ主ヲシラテ我先ニト落行ケル程ニ其勢大半ウタ
レテ散々ニ京ヘソ帰リケル亦ハ手負主捕ノ首三百余
宿ノ河原ニ切カケサセテ又摩耶ノ城ヘ帰ラントシテ
ケルヲ同心カ子息律師則祐進ニ出テ申シケルハ軍ノ
利ハ勝ニ乗テ北ルヲ追ニ不如今度寄手ノ名字ヲ尋ニ
京都ノ勢数ヲソクシテ向テ候ナル此勢トモ今四五日
ハ長途ノ負軍ニクタセレテ人馬トモニ物ノ用ニ立ヘ
カラス臆病神ノ覓メ先ニソヽヒテ責ル物ナラハ十ト
カ六波羅ヲ戦ノ中ニ攻落サテハ候ヘキ是太ク加兵
書ニ出テ子房カ心底ニ秘セシ所ニテ候ハスヤトイフ
ケレハ諸人ミナコノ伐ニ同シケル其夜頃テ宿川原ヲ
立テ路次ノ在家ニ火ヲカケ其光ヲ手松ニメ逃ル敵ニ
追スカウラ攻上リケリ

松永弾正久秀旧墨　摩耶山ノ内ニアリ

求塚　是ハ住吉ヨリハ南ミヌメノ西ニアリ元弘ニ摩耶合戦ノ時京方佐々木判官時信ノ陣取ト云傳フ建武年中ニハ戈具兵庫ノ合戦ニ負テ引キ退キ給フ時小山田太郎高家ニ扶ラレシモコノ所ナリ

科井村　左ノ海辺ニアリ

脇濱村　是ヨリ岩屋戸マテノ間ヲ三犬女浦トイフ或ハ敏馬ノ浦ト書淡路ノ嶋ハ自此辺南ノ海中ニ近々トアリ

人丸

万葉集　あもの原ふみなびき行く方の海に船ちの行くをみ

同

万葉十七　ひさかたの月は出にけりあまの原ふりさけみれば

とゆ雲隠れぬ

福光

同

あまとぶやかりの路ゆ雲ゐ

有景

法隆寺　鵤にあにこぬめれ浦乃海士を船いこの家うたた寝

基良

法隆寺　いつつにもひこれ家をを立て人をみぬめの浦のり

源彩康

法隆寺　くそみのくみぬめれ海の忘見ひるくひろ神ハぬ

定家

法隆寺　堂のめこ黒れ土ともひる家こぬめれたそあ海家

同

東集　后迄れもひの種して人をこぬめれうら見家そぬ

夫木　家をうしなひたりける女なるをとこの家をぬけ出て秋萩乃

同　言葉

さ露はせよ濱をいつる人あるを人をぬけ浦ハこの比

なみ人とうら濱

同　時つしをぬけ海を溝辺ハ中とこひしく思ふ

常盤井入道

袖集　汐こをぬけ松ハたゝつむ久堅ぬけ浦のあまの子ら

秋萩分松　秋ハ庵城分こを法吹風みつる我見ぬけうらみ面そ

定家

式ハ名あるを蘭ハ鈴濱に脇濱村と云とこゝ所あり

浦をいなもち社海ぬけ面もの所とゝ云みゝ丈女の浦と

とゝ云

うわ祢ハ海の松を表面ぬけ浦ら丈

脇掛松

脇濱ノ西ニアリ神功皇后ノ三韓ヲ退治シ帰リ給シトキ此松ニ脇當ト云者ヲ掛給シ故ニ名付ト云云古木ナリサレ共背ノ木ハ枯テ其後幾度モ植ツキタル木ノ由

小石川原

小石ノ濱ハ左ノ方海辺ナリ

自此辺右ノ方山上ハ佛母摩耶山切利天上寺ナリ自路
山上マテ行程廿町麓ヨリ寺マテ十八町走リ観音アリ
二月初午日ヲ祭日トシテ隣里遠境ノ里俗山上ニ群集
ス

多々部山　是ハ摩耶山ヨリ北ノ嶺黒ク茂タル大山ナ
リ此山モ観音ノ霊区ニ法道仙人ノ開基也

多々部山ハ兵庫ヨリモ北ニ康安二年楠正成兵庫ヲ焼
シトキ多々部ノ城ニハ赤松信濃彦五郎カ在シ丁前ノ
松罡ノ城条下ニ記之

岩屋戸村　岩屋村ニ云

中尾邑　共所ヨリ由ノ　禁裏ヘ若菜ヲ献スル例アル

小野坂　生田川ノ東ノ岸ニアル坂ナリ

小野崎　小野邑ハ坂ヨリ左方生田川ノ末ノ方ニアリ
古寺ニ生田ノ小野トヨメルハ此也

師頻

堀川院百首　旅人のみちとはなしをたつもとは生田の中の若菜つむ家

拾遺集　恋草ハ生田のをかの秋風にやのうへの色付神のゝ郷

追分　小野坂ノ辺ニアリ　是自赴右ハ布引ノ滝
路ナリ

熊内村　或ハ雲路村共云　砂山此所ナリ

布引山滝勝寺　熊内邑ニアリ　真言宗

本尊ハ観音ナリ此霊像ハ文武天皇ノ御宇ニ彼小角始処
ニテ修シ行シテ祈リ玉ヒケルニ地中ヨリ涌出ノ馬頭
観音ト云云

布引ノ瀑　長サ三十間ト云云但今ハ八十四五間ナリ是
ヲ雄滝ト云雌滝ハ是ヨリ下ニアリ伊勢物
語ニハ高サ大廣サ五丈許トアリ今ハ幅二間許

伊勢物語ニ　上略　海の深さしるらぬわたつみとなん
いさこの山乃こうらめいのもとゝ布引ノ滝ヲ乃ぞ
んといひ寄の深めて乃ぞに生たる松ともなりぬ
なり長サ廿丈ひろさ五丈もとの方石の表さ
松ぬ岩ぬ生たる姿ハ絵に成ぬ
うみにもうつるのを見さしていてしに石ぬ
ぞ石はうつ魚にもしもうつるしるの
をきあてこ深きあつうこ多人ぬ乃ぞ

らまたこのみまつのみまつよむ

とのらせ給へ　まつうしは源の頼朝のたのさん

なつ〜つ　ひとめらむ

ぬれてをる人こそ知らぬ白玉乃まつ久しき袖のせもれぬ

ときわかれもこうの人きつ〜とみやまたに舞こそ雪

あめ雨やこゝろ

朱雀院の五ゐと布引の滝にうんを舞とて又月

の七日社日をしまてをるをとれみさふ

らゐ人〜あらまつを玉ひたをるみちあ

ぬ〜ぬ　橘長盛

ぬ〜ぬ　ぬ〜ぬてきらを張布を七夕み永ゆをやたいのるまに

とゝ人人とをる

大きゆ　天河ながれやおこれのまたなり舞ゐをもり落る布引乃滝

波乃〜　仙人乃衣をぬらし白ゆ社月にさらを張布引のしるし

同　山姫のこゝの樹あ沙記の老てきらせ張布や滝ならか

後新

新続古今　ゆ乃ゑに社生田の川の水上ハ山のゆ〜ゆきうつも布引の滝

中務卿

玉葉　布引の滝も老さもあ変天寿生田のをくに衣ゆあ

法眼五隆元

文永　山姫の為ゆとやこの張布引社滝の白ゆまに樹の初雪

同

同　白滝を神名とてやうくひものをもてなす布引の滝

同　布引の滝みよこせをさそう人あまたまてあやしあは

同　宗乃風雨の白雲あの若葉をあの落葉布引社を見

同　布引の滝みあとしやらふとも世山中に滝たるあらん舞

同　布引社滝つせのそうて滝波波の梅の書をくる書社滝

同　明るしてさそふ布引の滝に落そふ紅麻の夜

法釈五覚法

新緑をの風乃さ萩笑ふとも落葉をもりまそう布引の滝

同　風を花をのうれ布引の滝ひとりあるこうとて

同　多ちぬをあ多葉を花をめのをてをに山姫の布引の滝

順徳院

同　乃上八滝のみ落てもあれを布引川乃末そこ浮れ

舞道

同　乃ま滝者八弥みとそられて松風落る布引社

世覚法師

同　布引の滝みてをふ日八若ぬ一枝布をみ称のさ世

立つの夏草や生国の社れいくさびのみまとものぬ布引の滝

同

入日さす夏もまつ雲い布引の滝のうまとものくまつ滝

兼保三年冥白屏布引の滝拾覚の事茶花物語廿書

それこそ屏布引の滝内流しみ拾引きたのれみちの

滝といと拾のしうさ滝のうまくのうしかくそくるとい

うこなりひらういひつ者花滝やにそまを詠う

冥白屏

さらし光詠こうひもろ武山姫の爲し拾つ布引れあれ

皇拾玄更弾房

ものれを白者とみあ滝があれさらし光ん布引乃たれ

皇左拾玄社家

珍しく雲おれ滝のあ山みあ滝のかとたかのれ屏布引の

皇拾玄更弾伝

雲おらもとと詠枝をつ滝流つさいあ山さ滝ぬくなり

三位中将師道

ものれ上乃滝に乃あ山を白玉れ立みまつ雲滝布引の滝

檀中拾特家

立つの夏草いくさびのあれいくさびも乃滝ともいつの布引の滝

中拾玄家

とと花にこふ山姫のさらしたくしの白玉とのぬ布沙れたれ

播磨守為家

永上八雲立こめて乃ち雨と称とも言ふ所布引の滝

旅宿

いとひとと言ふ海路に出ぬ山姫のたぶうみ強く春布引の

素布引の滝を乃あはうあ

永上八雲の事記と乃ふうらに雲とのあれ布引の滝

事ふみまいさねのぬたの岩角て名も知て春布引滝

山姫のいもはのうたをうえさぬ雨もつし春布引乃滝

飛多牟種滝ら紙沢みのもえ人のと村あこ乃里やそしこの里

布引や雲ふ所あといふ岩をを川ら雲ふ所の里

のもいまとり布引の名記雲ふ沢そ沢のわやのなる極め

日えこれうりぬまいはらしく久雨の降わつきし

らわいまうりてまこと多り言記ぬみ岩をつめ降や

みを詳有事所の言葉もをとひうしやりとてとふ

こと我いもそ降もあのいこうあまいを人のいのさとりをえ

わ乃ふふとうひらわしまにこの記つ事伝わぬ

羽衣みこまや降ん天乃女をりさら布引の滝

事記らしまこ降の里をうひ出て

布引言とり落涙滝れ雲の里名そうえ比る

武記みいまえ生田の川みいつ降いさこのうみみ降布引の

滝乃んとて川そひみち二十町極乃上み行て五町極山

みの降りこみ乃れい滝八東らわ落事降乃所南の

方に五十丈の屏風なりけるにいとこの布引の瀧のうへにかかる

いそしみありけて布引見たりける高さ五十丈もまた布引それ

となりかなしよりて見引と見えたるは山まで見えてところせき十丈

ばかりにて廣さなり山ぎはに二丈に三十丈ばかりのありたる雲山瀧

の西のふもとみなさしいでて流れたりそれより見えて平地にて切岸を

なしたるやうにたなびきたるそこよりも九折をなしてありて

瀧流る所あは川にて伊勢物語に云ふ丈ばかり五

丈もこのありとこの記見るに云とのもとに瀧口は四段みな落ちて家

岩のおもてみな放ちて流れおちは常に白くて見ぬ岩をつ

みてくだけたるやうになん布引ともいふ業平のめでし歌

於路記さしてさしてる所は瀧の本まで下にて流れてお

はしにいまうつし流れはいかうらし久しきの於保記さとの記を記

みなもと前白乃雨み瀧の流れまさりていつく落ちてこれを見

は之れ寓見ゆるに見る落流と記にさ侍ありけると

布引その岩に久しけていと〓見ぬみは橋の雪残りの時

いつくさそひて散りかやうに布引をも流るることに〓

となりもてはやす銀河の九天より落つると李白のめでし廬

山の瀑布とこの人は詠みしと於保由在原乃行平業平

の此瀧乃もと見記してありて妹なる家〓〓をならに遊せり久

家大政大臣は業平ともあにのむねと云ふ二条冥白内大臣

は在原の立まつる〓〓〓て〓海原なる流は〓〓ともも〓

記と於保ころの記家主補記は〓〓のうへとなり落と見な

しなどして〓〓〓〓人〓〓〓は〓しいたる記泥去〓

みもうつりしと〓〓〓〓〓の〓〓流をこれされたれ

[illegible]

悪源太義平ハ平治ノ乱ニ都ヲ落東國ニ赴ク美濃国青墓ニテ父義朝ニ別レ義朝ハ尾張ニ越義平ハ飛弾ノ國ヘ行義平ニ少々勢ツキタリトイヘ氏義朝於尾州内海為長田忠致生害ノ由冥ケレハ義平ニ属シタル勢共心替シテ相從モノ一人モナカリケレハ義平独歩シテ京ニ立帰リ丹波ノ国ノ住人内野六助景純ト云者トアヲ謀テ六波羅ニ舎リテ景純カ郎等ノ休ヲシテ清盛父子ノ間ヲ窺フ然ルニ六波羅ノ宿ノ主訥平家依之平氏ノ兵三百騎ニテ囲之義平臆セス走出光陣ノ兵四五騎キリフセ其ヨリ屋上ニノホリ屋上ヲツタヒ万死ヲ遁シ一生ニ逢石山寺ニ至リ暫ク忍テ在ケル又訥平氏者アリ終ニ雉波三郎カ為ニ生捕レテ六条川原ニテキラレシケシ惜哉其年廿其勇保元平治ノ物語ニ見エ悪源太霊トナリ摂津ノ国ノ布引ノ滝ニ詣ラレシト雷ト成テ清盛ヲ才ヒヤカシ雉波三郎オトリ殺ス清盛懼之一寺ヲ建立メ義平ノ霊才看トゝ云〻

譬ヘハ小松殿布引ノ滝為遊覧御参アリ景気実ニ面白シ
山ヨリ落岩波ハ糸ヲ亂セルカト疑シ岸ニタヽヘタル
渕水ハ藍ヲ染カトアヤシミタル泉ノ妙美(シミヅ)丼揚(アケ)サシト影
涼クソ思召ケル小松殿被仰ケルハ滝壺覺束ナシ底ノ
深サヲ知ハヤ坎中ニ誰カ剛者ノシカモヒ水練アルト
尋ケレハ備前國住人難波六郎経俊進出テ甲臆ハシラ
ス候滝壺ニ入テ見テ参ラント申然ルヘシトテ免サレ
タリ経俊ハ絆ノ優(シタヽヒ)カキ備前造ノ二尺八寸ノ太刀隨分
秘蔵シタリケルヲ脇ニ挾テ髪オ亂シテツット入四五丈モ
ヤ入ヌラントト思程ニ底ニイミシキ御殿ノ棟木ノ上ニ
落立タリケルカ腰ヨリ上ハ水ニアリ下ニハ水ニモナシ
穴不思議ト思ナカラサラヘト斬ヘ走下タレハ水ハ遥

ニ上ニアリコハ何トアルヿヤラント自ら騒キケレ共
心ヲシツメテヨク見ント思テ折ヨリ庭ニ飛下リ東西
南北見廻ハ四季ノ景気ヅ面白キ東ハ春ノ心地ニ四方ノ
山邊モ長閑ニテ霞ノ衣立渡リ谷ヨリ出ル鶯モ折端
ノ梅ニ囀池ノツラヽモ打解テ岸ノ青柳絲亂松ニ懸シ
ル藤花春ノ名残モ惜顔ナル南ハ夏ノ心地ニ立石遣水
底淨汀ニ生ル杜若階ノ木ノ蔭薇モ折知カホニ開ケ
タリ垣根ニ咲ル卯花雲井ニ名乗杜鵑沼ノ石垣水篭ニテ
菖蒲ニタルヽ五月雨ニ背ノ跡オ思ヘトヤ花橘ノ香リ
旬潭邊ニ乱飛蛍何トテ身ヲハ焦ヲラン梢ニ高ク鳴蟬
モ熟ヲサニ堪ヌ思カハ西ハ秋ノ心地ニ萩女郎花花傳故
指カハス籬ノ内朝ハ露ニ乱レツヽ夕ハ心ヤツヨクラン
梢ニツタヲ鶯庭ノ白菊色ソヘテ窓ノ紅葉々濃薄ニ妻
喚鹿ノ聲スコク哀ノ恐絶々之北ハ冬ノ心地ナリ木々
ノ梢モ禿ニテ焼野ヽ薄霜枯々降積雪ノ深ケレハ言問
道モ理レヌ池ノ汀ニ住シ鳥去テハイツクニ行ヌラン
峯吹片烈シウテ檐ノ筧モツラヽセリ庭ニハ金銀ノ沙
ヲ蒔池ニハ瑠璃ノリ橋溝ニハ琥珀ノ一橋ヲ渡シ馬
脳ノ石立珊瑚ノ礎眞珠ノ立砂四面ヲ莊レリ経俊立廻
テ穴目出是ヤコノ責長房カ入ケル壺公カ壺ノ内浦嶋
ヲ遊ケン名越ノ仙室ナルラント最面白思ツヽ暫々千
タリケン共如何ニト、カムル者モナシ良立間ハホノ
カニ機織音ノシケレハ太ヲ取直メ声知ルヘニ内ヘ入
見レハ年三十斗ナルカ長八尺モ有ラント覚ユル女ナリ

経俊ハ目モカケス機ヲ操テ居タリケリ難波六郎間ケ
ルハ是ハイヅクニテ侍ルソイカナル人ノ栖ソト云ハ女
答云是ハ布引ノ瀧壺ノ底竜宮城ニアヤシクモ来
者哉ト云テ又モイハサリケリ経俊浅間シト思テ御所ノ
上ヘ飛上リ棟木ノ上ニ立タレハ腰ヨリ上ハ水ニケリ
カヲ入テ躍タレハ水ノ中ニ入暫有テ滝壺ヘ浮出タリ
小松殿待エ玉テイカニ〳〵ト問玉ヘハ経俊有ノ儘ニソ
語リケル詞未ヲハラサリケルニ滝ノ面ニ呉雲雷鳴ア
カリテ大雨降イナヒカリシニテ目モヒラキカタシ経俊ハ
腹巻ニ太カヲヌキ小松殿ハ申ケルハ我ハ必ス雷ノ為
ニ失ナハレヌト覚侍リ程近ク御渡アラハ御アヤマリ所
モコリアラシカナ立サラセ給ヒテ事ノ様ヲ御覧候ヘ
ト申セハ実ニサルヘシトテ二町許ヲ隔テ見給ヘハ黒
雲経俊ヲ引廻シ雷ハタト鳴カトスレハ又雷ノ音ニハ
アラテハタト鳴ヲトシケリヤカテ空ハ晴ニケリ其後
小松殿人々相具シ給テ近ク寄テ見玉ヒケレハ経俊ハ散
々ニサケキレテウツフシニ臥テ死ニケリ太カニハ血付
テ前ニ猫ノ足ノ如ナル物ヲ切落シタリ係ケレハ小松
殿常ニ物語シ給ヒケルハ是程ノ大剛ノ者ニテ有ケ
ルヲ思慮ナク其身ヲ亡シタル事我一期ノ不覚ヨトソ
仰ケル智者ノ千慮有一失ト云ハ加様ノ事ニヤ小松殿
薨シ給テ後ハ前ノ右大将ノ方様ノ者ハ世ハ此御所ヘ
進リナレトテ悦ケリ穏カルマシキ事トモ知ス加様ニソ
シケルコソヲロカナレ

生田川　歩渡り是ハ布引ノ滝ノ下流十里

此川ヨリ西ハ八部郡十里

名所方角ハあいた久生田小山南ハ海東西廣さ弐

ところなり　求塚由来因

ちぬ男作ル因男の塚をハ東西中ニ一里法くたり

十八町つゝの中ゆうゆひをとめ共つゝをつゝ小丘わ

これつゝのうち小なり地ハ海也ゝ海をたゝ南に見ゝ

[illegible]高原をくに招の浦より東の山をくだりてこの
[illegible]神[illegible]和[illegible]の川も歳色くゝ小なる面影あるのれしるし小川
[illegible]なる生田に池も[illegible]の川ハ布引の滝の落るれなるべし
私ニ曰此川ソイハ此所ニアヒタリ其外ハ大様ニテ
不詳

基隆

[illegible]拾遺 [illegible]の[illegible]生田の川の名上ハ[illegible]布引の滝

雅縁

[illegible]古 生田川名の秋ぞとてまきて木葉をながす杜乃風

生田　里　杜　海　池　野　共古哥多シ

生田大明神　自路右ノ方夷ノ内ニアリ

本社ハ天照太神ノ御妹雅日女尊也貞観九年十二月十六日ニ従二位ヲ贈ヲル社領二百石有シ由今ハ絶テ領主ヨリ繞ニ田二反ヲ寄附セラル

日本紀曰雅日女尊坐于舟服殿而織神之御服之素戔烏尊見之則逆剥斑駒投入之殿内雅日女尊乃驚玉ニ而隨我以所持後傷休而神退矣

雅日女者天照大神之妹也

又曰神功皇后時雅日女尊詣之曰吾欲居活田長峽國

因海以上五十挾茅令祭之

津国の住侍従大江の為基の住
てのほり侍られをつのまま侍
俊頼法師

河内　君住ぬとやまゝまれおほの浦の玉乃生田乃杜の秋の初風
家隆

秋古今　紀の友則の歌にとを舞とゆゝ津の国の生田の杜の秋の夕風
ゆふ侍ぬ

後法興院　秋とたに吹ぬ風に色こゝろ生田の杜の夏の下草
俊成

後古今　ちはやぶる生田の杜の秋風に友なこゝろる萩の枝の花を
順徳院

同

秋風の又ふそとゝめ津の国の生田の杜書乃四ほの
玉葉　時雨有ける生田の杜の夏の下草
京極

新拾遺　津の国の生田の杜の時雨ふるとのもとの秋そとゝほ
大僧都如

古今集　妹この家の生田の杜の苗のもとこと舞書えこゝてそいとめ
西行

西院院　色こに木葉手向て秋ゝ来ぬ生田乃ゆもにつ七ゝてゆ
為家

三条西家　いとゝ、生田の杜の時雨ふる舞秋むるとふ知こしのやま
俊成

丈本　笑を記し生田の杜に秋のをも萩の露ともみれば人々

月　秋ハ来ハ生田乃森ゆふるあらし玉簾ぬ[illegible]其間の薄風

俊教

月　志ゐまふと志ひめそのゆをといて生田の森をとらるにこそ

讀人志らず

月　秋ハ来ハ生田の森ゆふるあらし難波の海に風ぞ絶て

生田ノ池　社ノ前ニアリ

をみな人志らず

はの宮に生田の池乃いくしほのつるれとひを家みこそ

東陽

丈本　久しきぬとて生田の池を立寄れ秋をふさむき梅の下を

為兼

月　ふつ〻生田に池に玉もゆ外神ゝ秋の家を記ゝ

花宗

生田ノ奥

義社　淺川ゝ記ねのとこにゆ由なわいと母の奥の芋廉に

芝方

ふ松　袁之生田のをゝの星人も月のとかゝ〻ゆ[illegible]

磯トモヨリ　　為家

夫木　あみたらむ沖乃をやてかつしこの拝生田の磯によませは　なかね

海ヲヨメル哥　　兼家母

拾遺抄　をくれてハ生田の海乃このしもなしたらむみえつとおみあら　なん

里トモヨメリ　　俊成

夫木　稲葉ふく風にことみそちにさわぎ生田の里の秋の夕暮

小田トモヨメリ　　寂家

同　夕されはおしやれ沖につをとて生田の小田も涼しからぬかな

或説にいはく生田に社ぬさよりの二所社ありの中をさくて右橋のあたりそれまた海にちかき大明神の社にあはけの玉つきしるしてあり社ハ二ヶ所西にありて面白く大かたハさまへりし　一三

る社西の隣一殿ありて東西に赤社二社つくりてあり西のかたに二ヶ所西の宝殿ありこれ神ハ稚日女尊之神功皇后の御神託によりてこれところに鎮坐したまふ飛まて海ハとハいましめのをとよみしハこれ社をあんのひと御子歌にまてあるものありけらしみゆる

落ちたる生田のむかしよりも今も時となりのすさきの海

社ハ社拝西の方にこれ社中にありまた此上で二ヶ所にあり都に秋風にもうつ稲刈のさ海なあり梶原のうきしたさし箙の梅をとめて生田川にうつ流

生田萩

社ノ西ニアリ是ヲ敦盛ノ萩ト号ス

教盛ノ子ノ堂　一間四面　社ノ度ニ肉桂ノ木アリ

此外小野、長者ノ旧跡アリ里民ノ俗説アリトイヘトモ略之

此交ハ二ノ谷ノ合戦ノ時新中納言知盛李三位中将重衡陣所ナリ

筬ノ梅　社ノ内ニアリ薄紅ノ馬場ノ内ノ

梶原景季カ筬ニサシタル梅ヲ此処ニサシテ哥ヲ詠ス

ト云ヘ

川原兄弟ノ塚　生田ノ馬場崎ヨリ二町西ノ畠ノ中ニアリシルシノ松アリ

元暦元年二月武品ノ住人河原太郎私ノ高直同次郎盛直生田ノ社ノ先陣ノ討タル所也

国立公文書館
National Archives of Japan

延元々年五月廿五日湊川ノ合戦ニ楠ノ正成已ニ討シ
ケレハ将軍左馬乃ト一所ニ合テ新田左中将ニ打テカ
カリ給ヲ負是ヲ見テ西ノ宮ヨリカヽル敵ハ旗ノ紋ヲ
見ルニ未々ノ朝敵共ナリ湊川ヨリカヽル勢ハ尊氏直
義ト覚ルヲ是コソ願フ処ノ敵ナレトテ西ノ宮ヨリ取
テ返シ生田ノ森ヲ後ニ當テ四万余騎ヲ三手ニ分テ敵
ヲ三方ニソ受ラレケル兩陣互ニ勢ヲ振テ時ヲ作リ色
ヲ合ス先一番ニ大館左馬助氏明江田兵ア太浦行義三
千余騎ニテ仁木細川カ六万余騎ニカケ合テ火ヲ散シテ
相戦フ其勢互ニ討レテ兩方ヘ汎ト引ノケハ二番ニ中
ノ院中将定平大江田里見鳥山五千余騎ニテ高上杉カ八
万余騎ニ駈合テ半時斗黒烟ヲ立テ操合タリ其勢共戦
ヒツカレテ兩方ヘ汎ト引退ケハ三番ニ服屋右エ門佐義助
宇都宮治ア太浦菊地次郎河野土居得能一万余騎
テ左馬乃吉良石堂カ十万余騎懸合セ天ヲ響シ地
ヲ動シテ攻戦フ或ハ引組テ落重テ頸ヲ取モアリトウ
ルヽモアリ或ハ敵ト手違テ同ノ馬ヨリ落ルモアリ兩
虎二竜ノ闘ニ何レモ討ルヽ者多アリケレハ兩方東西
ヘ引ノキテ人馬ノ息ヲソ休ノケル新田左中将是ヲ見
テ荒手ノ兵既ニ盡テ戦ヒ未決是義貞カ自アタルヘキ
所ナリトテ二万三千余騎ヲ左右ニ立テ将軍ノ三十万
騎ニ駈合兵刃ヲ交ヘテ命ヲ鴻毛ヨリモ軽クセリ宦軍
ノ惣大将ト武家ノ上将軍ト自戦フ軍ナレハ射落サル
レモ矢ヲ抜ニ隙ナリ組テ下ニナレモ落合テ助レ者ト

シ只子ハ親ヲ棄テ切合郎著ハ主ニ離レテ戦ヘハ馬ノ馳
遁フ色太カノ鐔音イカヲナル修羅ノ闘諍モ是ニハ過シ
トヲヒタヽシ先キ一軍メ引シサリタル両方ノ勢モ
今ハイツヲ可期ナレハ四隊ノ陣一所ニ拳テ敵ト相交
リ中黒ノ旗ト二引両ト巴ノ旗ト掄違ト東ヘナヒキ西
ヘナヒキ磯山風ニ翩翻シテ入違タル計ニテ何レヲ御
方ノ勢トハ見エワカス新田足利ノ國ノ爭ヒ今ヲ限リ
トソ見エタリ宦軍ハ元来小勢ナレハ命ヲ狂シテ戦フ
トイヘモ遂ニハ大敵ニ懸負テ残ル勢纔ニ三千余騎生
田ノ森東ヨリ丹波路ヲ差テソ落行ケル数方ノ敵勝ニ
乗テ是ヲ追フ甚急ナリサレモ何モノ習ナレハ我負朝
臣御方ノ軍勢ヲ落延サセン為ニ後陣ニ引サカリテ返
合セ〳〵戦ケル我負ノ被レ乗クル馬ニ矢七筋ハケ立ケル
間小膝ヲ折テ倒レケリ我負求塚ノ上ニ下リ立テ乗替
ノ馬ヲ得給ヘモ敢テ御方是ヲ知サリケルニヤ下リテ
乗セントスル人モナカリケリ敵ヤコレヲ是知タリケ
ン即取篭テ是ヲ討ントシケルカ其勢ニ僻易メ近クハ
更ニ寄サリケレモ十方ヨリ遠矢ヲ射ケル矢雨ノフル
ヨリモ猶繁シ我負ハ薄金ト云甲ニ鬼切鬼丸トテ多田
満中ヨリ傳リタル源氏重代ノ太カヲ二振帯シタリケ
ルヲ左右ノ手ニ抜持サカル矢ヲハ飛越アカル矢ニハサ
シウツフキ真中ヲサシテイル矢ヲハ二振ノ太カヲ相交
ヘテ十六ニテハ切テ落サレケル其有様タトヘハ多門
持國増長廣目ノ四天須弥ノ四方ニスヽンテ同時ニ

八十ツ矢ヲ捷疾鬼ト云鬼走リ廻テ未其矢ノ大海ニ不落等前ニ四ノ矢ヲ取テ返ルランニセカクヤト覚ル計リ十リ小山田太郎高家遥ニ山ノ上ヨリ是ヲ見テ諸鐙ヲ合テ馳参テ已カ馬ニ義貞ヲ乗セ奉リ我身ハ徒立ニ成テ追カヽル敵ヲ防ケルカ敵アマタニ取籠ラレテ遂ニ討レニケリ其間義貞朝臣ハ御方ノ勢ノ中ヘ駆入テ虎口ノ害ヲ遁シ玉フ抑高家カ大将ノ命ニ替リシ事ハ去年西国ノ討手ヲ兼テ義貞下向ノ時高家法令ヲ背キ青蚨ヲカリシ科ニ依テ已ニ可被行罪科ニヲ義貞ノ情ニ依テ無恙リ報恩依テ之ト太平記ニ委シ

城ノ口　生田杜ヨリ五町西十リ

大竜寺　城ノ口ニアリ此寺ノ西ニ梶原景時カ二度ノ懸之時ノシルシノ石トテアリ

當寺ヲ再度山ト号ス弘法大師入唐ノ前當寺ニテ求聞持ノ法ヲ修シ帰朝ノ後又此寺ニ暫ク住セラル故ニ再度ノ号アリト或ハ摩尼山共云ト十リ本尊観音弘法大師ノ影堂ナトアリ真言宗

大竜寺ノ山ハ康安年中ニ楠兵庫ヲ焼シトキ赤松信濃判官彦五郎則実ヲ城ヲ構シ所ナリ太平記ニハ多々部ノ城トアリフタ、ヒ山ト云ヲ多々部ト誤ル欲今里俗ハタ、ヒノ観音ト云ヒハ前ノ山路ノ城ノ条下ニ記ス

佐用ノ中山　右ノ山ヲ云

福原ノ庄　町ヨリ左ヘ

神辺　自脇濱到千里

自是兵庫ヘ一里十リ北駅宿

坂本村　自路右ノ山下ニアリ自海道ヨリ五六町ニシテ
二ル

大悲山安養寺　成覚院　坂本村ノ山上ニアリ

自尼崎是マテハ行程六里半之

貞享元年八月二日青山大膳亮幸利卒去此所ニ葬ス
石塔アリ　成覚院前光禄廓誉一法道山大居士ト云ク

此寺開基ハ還誉上人之浄土宗

醫王山廣厳寺寶勝禅寺　坂本邑ニアリ

當寺ハ後醍醐天皇ノ勅願所俊明極ノ開基之此寺ニテ
建武楠正成同帯ヲ正季兄弟サシ違テ死ス殉死併人
過去帳ニ各名ヲ記メ有ト云シ

楠塚ハ寺ヨリ二町南自海道ハ一町余北ナリ

此所ハ兵庫ヨリハ東北ノ方ニアタル

此碑石ハ元禄六年ニ　水戸黄門ノ御建ニ十リ石碑ノ
裏ニ彫刻メ有之

花隈旧墨　自路尤ノ濵辺ニアリ　天上ニ荒木志ヲ守カ
守城之

徳太平記曰将軍義昭ヲ備後國ニ御下向アリテ毛利小早
川ヲ御頼アリテ軍勢ヲ催シ上洛シ給フ由聞シカハ幾内
国中ノ武士大半御方ニ馳加ル中ニモ摂津国住人荒
木摂津守村重舎弟志ヲ守一族集人佐同所孫同越中
守同久左エ門野相丹後守牧左兵衛尉各摂津国伊丹尾
崎花隈ノ三ヶ所ニ搦篭
花隈ノ城ニハ荒木志ヲ守加勢ニハ防弱ノ住人杉次郎左
エ門尉元家一千余騎ニテ入淡路ノ宮屋ノ城モ勢微十
リトテ安藝国ノ住人長屋左近大浦八百余騎ニテ加
勢スト云ヘ

織田家譜曰天正六年十月
荒木摂津守村重謀叛於攝州信長使宮内卿法印友閑明
智日向守方見仙千代諭之荒木欲謝罪而詣安土家人皆
曰一旦縱雖逢赦必不能免終則不如早起事之荒木遂叛
小寺官兵衛諫之不聽荒木拘小寺小寺脫帰信長率兵討
荒木以三男三七信孝為安土留守稲葉伊与守不破河内
守丸毛兵庫頭副之信長入洛集兵進到山崎陣信長屯于
天神馬場中略到昆陽野使諸將攻花隈城放火於兵庫辺
同八年三月池田信輝其子之助輝政時号古狐攻敗摂州花熊
城

荒木摂津守黨志ノ守居之ト云

此後池田信輝ノ領ト十ル
豊臣家譜ニ曰天正十年山崎合戦ノ時有毘尼崎花熊三ノ
城ハ池田守之ト云

差方塚　捕塚ノ南ニアリ自海道一町半西十リ

是ハ治兼年中ニ迁都トキ此所ニ塚ヲ築テ新都ノ丁始
トス池大納言國經々奉之地形ヲ是ヨリ割出ルト云

荒田村　自道右ニアリ

荒田村ノ西ニ安徳帝ノ假ノ皇居ノ旧跡アリ此所ハ頼盛
々ノ山庄ノ由

若渕ノ崎　自路左ノ海辺ニアリ　湊川ノ海ニ入所ニ

湊川　兵庫ノ入口兵庫ヨリハ東三町許ニアリ

坎川昔ハ兵庫ノ西ニ流ルト十リ何ノ時川節替リタル
欲知タルヒ十ニシ山川共ニ古哥多シ又古戦場ニ

千載　湊川の流れは底あれこゆる生田の杜の秋の末の

新勅撰　湊川舟漕いつる風遅れて廉の上越す白川とりて

為氏

湊川この川流も中くつて汐干てあらる五月雨のころ

風雅　五月雨と川及の引てはやる流れ共ふるのれ雨ふるさせ共ゆふ

為忠

桂玉　秋ふの流れ我友舟や湊川生田の杜は木葉ちるし

慈鎮

文水　湊川こ流れ物憂時ふる和田はみさ紅の杉あり

公卿

月　五月雨と川流れはとこあれこゆる秋をつ多物く廉も哭ふ

慈鎮

月　明ふ月新と之原海ゆ湊川東は秋の杉ふ陰

為家

月　秋とこのうね桂引共は湊川さ入舟もとこ海尼

渋川義季一族并名誉ノ者ノ事

渋川名誉ノ人々

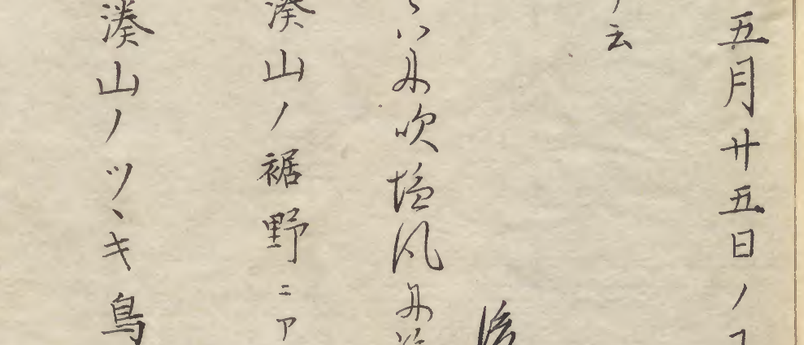
楠判官正成舎弟帯刀正季七百余騎渋川ノ西ノ宮ニ扣テ有ケルカ正成舎弟正季ニ向テ申ケルハ敵前後ヲ遮テ御方ノ陣ヲ隔タリ今ハ遁レヌ所ト覚ルソイサヤ先前ヲ懸ケ敵ヲ一散シ追捲テ後ヲ敵ニ戦ハント申ケレハ正季可然覚候ト同メ七百余騎ヲ前後ニ立テ大勢ノ中ヘ馳入ケル左馬刑部直義ノ兵者菊水ノ旗ヲ見テヨキ敵ヲリト思ケレハ取篭テ是ヲ討ントシケレトモ正成正季東ヨリ西ヘ破テ通リ北ヨリ南ヘ追ナヒケヨキ敵ト見ルヲハ馳双テ組テ落テハ首ヲトリ合ハヌ敵ト思フニハ一太刀ウツテ懸チラス正成ト正季ト七合テ七度ウツカル其心偏ニ左馬頭ニ近付組テ討ントト思ヒアリ遂ニ左馬刑部ノ五十ケ騎楠カ七百余騎ニカケナヒケラレテ又須磨ノ上野ノ方ヘソ引返シケル直義朝臣ノ乗レタリケル馬矢尻ヲ踏ニ踏テ右ノ足ヲ引ケル間楠カ勢ニ追ツメラレテ已ニ討レントシ玉フ処ニ茅師寺十郎次郎只一騎蓮池ノ堤マテ返シ合セテ馬ヨリ飛テヲリ二尺五寸ノ小長カノ石ツキヲ取延カヽル敵ノ馬ノ平頸ムナカヒノ引廻シ切テハ例々々七八度カ程切テ落シケル其間ニ直義ハ馬ヲ乗替テ遥々ト落延給ケリ

左馬頭楠ニ追立テラレテ引退クヲ将軍見給テ荒手ヲ入替テ直ニ討スナト下知セラレケレハ吉良石堂高山杉ノ人々六十余騎ニテ湊川ノ東ヘカケ出テ跡ヲ切ラントツ取巻ケル正成正季又取テ返テ北勢トカヽリ懸テハ歩遣歩遣テハ馳入テ三時計カ其間ニ十六度マテ闘ヒケルニ其勢次第ノヽニ減テ後ハ纔ニ七十三騎ニソ成ニケル北勢ニテモ歩破テ落ハ落ツヘカリケルヲ楠京ヲ出シヨリ世中ノ一合ハ是マテト思フ処存有ケレハ一足モ引ス戦テ拵已ニ疲レケンハ湊川ノ北ニアタツテ在家一村有ケル中ヘ走入テ腹ヲキラン為ニ鎧ヲ脱テ我身ヲ見ニ斬疵十一ヶ所マテソ負タリケル此外七十二人ノ者トモ皆五ヶ所三ヶ所ノ疵ヲ蒙ラヌ者ハナカリケリ楠カ一族十三人手ノ者六十余人六間ノ客殿ニ二行ニ双居テ念佛十返計同音ニ唱テ一度ニ腹ヲソ切タリケル正成座上ニ居ツヽ正季ニ向テ抑最期ノ一念ニ依テ善悪ノ生ヲ引トイヘリ九界ノ間ニ何カ御辺ノ願ナルト問ケレハ正季カラ〳〵ト笑テ七生マテ只同シ人間ニ生レテ朝敵ヲ滅サハヤトコソ存候ヘト申ケレハ正成ヨニ嘻ケナル気色ニテ罪業深キ悪念ナレ共我モ如様ニ思ナリイサヽラハ同ク生レテ坎本懐ヲ遂セントト契テ兄弟共差違ヘテ同ク生ヲ替テ此本懐ヲ達セントト契テ兄弟共ニ差違ヘテ同抱ニ臥ニケリ橋本八郎正員宇佐見河内守正安神宮寺ノ太郎兵衛正師和田五郎正隆ヲ始トシテ宗徒ノ一族十六人相隨フ兵五十余人思

思ニ並居テ一度ニ腹ヲソ切タリケル菊地七郎武朝ワ
兄ノ肥前守カ使ニテ須ニノ口ノ合戦ノ休ヲ見ニ来リケ
ルカ正成カ腹ヲ切処ヘ行合テヲメノヽト見捨テハイカ
カ帰ヘキト思ケルニヤ同自害ヲシテ炎ノ中ニ卧ニ
ケリ柳元弘以来忝モ此君ニ憑レ進セテ忠ヲ致シ功
ニホコル者幾千万ソヤ然ニ此世乱又出来テ後仁ヲ知ス
モノハ朝恩ヲ捨テ敵ニ属シ勇ナキ者ハ苟モ死ヲ免シ
シトテ刑戮ニアヒ智ナキ者ハ時ノ変ヲ弁セスシテ道
ニ違フヿノミ有シニ智仁勇ノ三徳ヲ兼テ死ヲ善ニ守
ルハ古ヘヨリ今ニ至ルマテ正成ホトノ者ハ未タナカ
リツルニ兄弟共ニ自害シケルコソ聖主再ヒ國ヲ失ヒ
逆臣横マニ威ヲ振フヘキ其前表ノシルシナリ

是ハ延元々年五月廿五日ノ丁也

湊山ハ此川上ノ山ヲ云



雲見ノ御所　湊山ノ裾野ニアリ

小宰相ノ局ノ石塔　湊山ノツヽキ鳥原邑ニアリ

是ハ越前三位平通盛卿ノ妾也

国立公文書館
National Archives of Japan